

2005年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2005年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2006年10月

はじめに

総 長

本学の「学生による授業評価アンケート」は、数年にわたる全学的な議論のうえで 2004 年度から開始した。この報告書は、第 2 回となる 2005 年度の分析結果をまとめたものである。

わずか 2 年間のデータではあるが、すでにいくつかの効果や課題が明らかになってきている。まず、2004 年度と比較すると、全体的な傾向は変化していないが、各項目の得点が有意に上昇しており、授業改善の効果が上がっていることがうかがえる。これは、教員個人が授業改善をいっそう意識するようになった結果だと、考えられる。

一方、個別の授業における教員の個人的努力だけでは解決できない課題があることも、次第に共通認識となってきた。たとえば、自習時間の少なさとして現れているが、学習が講義場面だけで完結してしまい自発的・発展的な学習につながっていない様子や、学生がノートの取り方に習熟していないというスタディ・スキルの不足、私語に代表されるスチューデント・マナーの問題などである。教室不足のために授業に適した教室が割り当てられないことや、当該科目のカリキュラム体系上の位置付けがアンケート結果に影響していることも指摘されている。

大学としては、こうした課題に組織として真剣に取り組む段階を迎えている。とくに教室をはじめとする「学びの場」の整備や「個のケア」の充実を急ぎたい。各学部・学科等においても、それぞれの状況に応じた解決策を組織的に講じられることを期待したい。

「学生による授業評価アンケート」から得られた知見は、報告書以外の方法でも活用が図られている。科目担当教員によるアンケート結果に対する所見は、本学の授業評価制度の特徴のひとつであるが、所見集としてまとめ、図書館に備え付けられている。また、アンケートを通じて得られた教員の授業の工夫を「立教授業ハンドブック」にまとめ、全教員に配布した。さらに、ワークショップを開催し、学生とともに「授業」を考える機会を持った。これらを通じて、学生が、授業評価アンケートに対する関心を高め、教員とともに授業を創っていくことにつながればと願っている。

「授業評価アンケート」の実施以降、データに基づいて施策を立てることが学内に浸透してきていることも、アンケートのもたらした大きな成果であろう。

今後は、学修面に限らず、経済状況など生活面をも含む実態に目を向け、立教大学での学びの成果をあげるための方策を推進していきたいと考えている。

2005 年度「学生による授業評価アンケート」を終えて

2005 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 栗田 和明

2004 年度から本格実施された「学生による授業評価アンケート」が、2 年目を無事終了した。当初、授業評価アンケートに対してはさまざまな懸念や不安が一部存在したが、2 年目を終え、現在では学内に定着した感がある。ここまで来るのに、教職員をはじめとするさまざまな方々のご協力とご支援を受けた。こうした方々と、何と云っても、評価の主体である学生諸君にこの場を借りて御礼申し上げたい。

授業評価アンケートの結果、講義への出席率、授業時間外での学習時間、板書の問題等さまざまなことが分かってきた。こうした問題は、今回のアンケートの実施によってはじめて全学的に把握できた問題であり、アンケートの意義を実感するものである。

さらに本学では、これらの結果をもとに、教職員による「学生による授業評価アンケート」ワークショップ、学生も参加した「学生から見た授業評価アンケート」ワークショップなどが開始された。他大学で、授業評価の結果が有効に活用されないことの多い中、本学では、授業改善の具体的な歩みを始めた。数年後には、こうした活動の効果が目に見えるものになって現れることであろう。

本学の授業評価は、まだ端緒についたばかりである。教職員と学生との全学的「協働」として、この試みを長く継続し、具体的な授業改善の効果に結びつく活動に育てていきたいと考えている。

目次

はじめに	
2005年度「学生による授業評価アンケート」を終えて	
1. 授業評価アンケートの実施目的	
1 - 1	目的 1
1 - 2	「報告書」作成の基本的な考え方 2
1 - 3	「所見票」について 3
2. 授業評価アンケートの実施概要	
2 - 1	実施方式 7
2 - 2	設問項目 7
2 - 3	実施対象科目 11
2 - 4	実施教員数・実施科目数 11
2 - 5	実施期間 11
2 - 6	回答数（全学・学部別） 12
3. 授業評価アンケートの集計方法	
3 - 1	分析の概要 13
3 - 2	提供データについて 13
3 - 3	統計的分析について 14
4. 全学総評	
4 - 1	全学総評の要点 15
4 - 2	集計データから見られる結果のまとめ 15
4 - 3	担当教員からの所見票に対するまとめ 23
5. 学部等総評	
5 - 1	文学部 27
5 - 2	経済学部 31
5 - 3	理学部 37
5 - 4	社会学部 41
5 - 5	法学部 49
5 - 6	観光学部 53
5 - 7	コミュニティ福祉学部 57
5 - 8	全学共通カリキュラム 61
5 - 9	学校・社会教育講座 67
6. 集計データについて（資料編）	
6 - 1	学年および学内・学外者の度数 71
6 - 2	項目内容と項目別平均値（全学） 72
6 - 3	回答者数と履修者数の比率 73
6 - 4	「総合評価」の平均値の学部間の比較 74
6 - 5	「総合評価」の平均値の授業規模による比較 77
6 - 6	項目の相関 78
6 - 7	「総合評価」の平均値の学年間の比較 79
6 - 8	「所見集」の設置場所 80

1 . 授業評価アンケートの実施目的

(2004 年度報告書より転載)

1 - 1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002 年 7 月 10 日に総長に提出された「全学 FD 検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要 FD 課題として次の 3 点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002 年 12 月 18 日付け文書「FD について 学生による教育評価アンケートの 2003 年度実施に当たって 」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の 2002 年 12 月 21 日には早くも全学教務委員会 FD 専門部会の第 1 回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003 年度実施は見送られ 2004 年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003 年の秋に 2004 年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004 年度 4 月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。

教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。

学生の学習姿勢を知るための資料とする。

学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。

学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。

学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。

大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能することを目指して改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、

創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1 - 2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1 - 1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そして次回アンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)

その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている 学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての 学生の学習姿勢を知るための資料、および 学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の とは次に述べられる所見票に示されるだろう。 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1 - 3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(P.5参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。

学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。

アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。

改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回のアンケートとの比較を行いやすくし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

2 . 授業評価アンケートの実施概要

2 - 1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間）において行うこととした。

なお、実施委員会では、アンケートの実施にあたって、その方式として、質問紙による方式と Web による方式とが検討された。全体の業務量や集計データの加工の容易さからすると Web による方式が望ましいと考えられたが、検討の結果、授業評価アンケートが定着していない現状では、有意の回収率を得ることが難しいと判断し、質問紙による方式を採用した。

2 - 2 設問項目

アンケートの質問紙は、5 段階による評価方式の設問を 23 設問、自由記述欄を 2 箇所の構成とした（P.8、P.9 参照）。設問は、2004 年度と同一とした。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もある。例えば、「板書のしかたが適切だった」との設問は、板書を使用しない授業を行う教員には必要がない、といったケースである。実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2005 年度は、文学部（2 設問） 経済学部（1 設問） 理学部（1 設問） 観光学部（7 設問） 全学共通カリキュラム（2 設問）が学部設問項目を設定した（P.10 参照）。

2005年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。回答の内容が、この授業についてのあなたの成績評価に影響することはまったくありません。また、この調査はすべての項目について5の評価が得られることを理想とはしていません。率直かつ責任をもった回答をお願いします。
立教大学

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード	本学学部生
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚	学部 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚	学科 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚	学年 ① ② ③ ④
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚	本学学部生以外 ㉛
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚	(注意) 1. マークにはH用の鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要な項目を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。 4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 科目コードにマークミスがあった場合にはこの調査票は無効となる。 6. 折りまげたり汚したりしないこと。

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
(評価欄)

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した	⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	⑤ ④ ③ ② ①
6) 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (次の中から選んでマークしてください) 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	⑤ ④ ③ ② ①
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 聞きやすい話し方だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静肅性が保たれた	⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHP、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	⑤ ④ ③ ② ①
III. この授業の内容は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 新しい考え方・発想に触れた	⑤ ④ ③ ② ①
2) 基本的知識が得られた	⑤ ④ ③ ② ①
3) テーマが現代的な意味を持っていた	⑤ ④ ③ ② ①
4) 最新の学問成果に触れた	⑤ ④ ③ ② ①
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) わかりやすい授業だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた	⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した	⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問	
1) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
2) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
3) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
4) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
5) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
6) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
7) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①

VI. 自由記述 (以下の質問について自由にお答えください)

1) この授業で良いと思った点があれば書いてください。

2) この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。

ご協力ありがとうございました

2005 年度立教大学授業評価アンケート

．学部等による設問

以下の項目に対して、あなたにとって 5 段階のどの評価であるか、別紙『2005 年度立教大学授業評価アンケート』裏面の「 ．学部等による設問」〔評価欄〕にマークしてください。

- 5：とてもそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない
1：そう思わない

（文学部）

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった。
- 2) この授業の受講者数は適切だった。

（経済学部）

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった。

（理学部）

- 1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた。

（観光学部）

- 1) わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ。（観光学部以外の学生は答えないこと）
- 2) わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う。
- 3) わたしは、武蔵野新座キャンパスで学ぶことに満足している。
- 4) わたしは、旅行することが好きだ。
- 5) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した。
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた。
- 7) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた。

（全学共通カリキュラム）

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった。
- 2) この授業の受講者数は適切だった。

以 上

2 - 3 実施対象科目

実施科目は、学部講義科目（学校・社会教育講座および全学共通カリキュラムを含む）を対象とし、専任教員、兼任教員を問わず、2005 年度中に 1 教員 1 科目について実施することを原則とした。

実施科目の選定は、学部等 F D 委員会が、この原則に従いつつカリキュラムとの関連等を考慮し行った。なお、学部等 F D 委員会の判断で必要に応じて 1 教員複数科目の実施も可とした。また、全学共通カリキュラム運営センターの決定により、全学共通カリキュラム総合教育科目を担当する教員は、専門科目での実施にかかわらず、全学共通カリキュラム総合教育科目を対象として 1 教員 1 科目の実施が適用された。

2 - 4 実施教員数・実施科目数

（2006 年 6 月 20 日現在）

	対 象 科目数	担当者内訳		実 施 科目数	担当者内訳		所見票 提出数	担当者内訳	
		専 任	兼 任		専 任	兼 任		専 任	兼 任
文 学 部	184	41	143	183	40	143	157	33	124
経 済 学 部	100	36	64	99	35	64	89	33	56
理 学 部	94	50	44	94	50	44	87	48	39
社 会 学 部	115	31	84	113	30	83	92	24	68
法 学 部	69	40	29	69	40	29	60	36	24
観 光 学 部	70	25	45	69	25	44	61	23	38
コミュニティ福祉学部	70	20	50	69	20	49	53	14	39
全学共通カリキュラム	205	61	144	198	58	140	173	49	124
学校・社会教育講座	62	8	54	61	8	53	57	7	50
合 計	969	312	657	955	306	649	829	267	562

注 1) 通年科目の前期・後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合、前期 1 科目・後期 1 科目としてカウントした。

注 2) 半期科目で複数の科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合、各科目担当者毎に 1 科目としてカウントした。

2 - 5 実施期間

実施は、授業が進行した後半の時期が好ましい 試験の時期は避けることから下記の期間とした。

前期 : 2005 年 6 月 23 日 (木) から 6 月 29 日 (水)

後期 : 2005 年 12 月 5 日 (月) から 12 月 10 日 (土)

上記期間内に実施できない場合は翌週に実施することとした。

2 - 6 回答数（全学・学部別）

	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	9,230	5,307	7,705	3,847	16,935	9,154
経 済 学 部	667	258	22,291	7,395	22,958	7,653
理 学 部	2,739	1,467	3,211	1,415	5,950	2,882
社 会 学 部	7,689	3,345	8,036	3,038	15,725	6,383
法 学 部	7,866	2,816	13,183	4,161	21,049	6,977
観 光 学 部	5,354	2,519	2,607	1,242	7,961	3,761
コミュニティ福祉学部	4,260	2,235	3,438	1,739	7,698	3,974
全学共通カリキュラム	17,234	8,668	18,022	7,436	35,256	16,104
学校・社会教育講座	2,696	1,945	1,112	777	3,808	2,722
合 計	57,735	28,560	79,605	31,050	137,340	59,610

注) 履修者数・回答者数はいずれも述べ人数

3 . 授業評価アンケートの集計方法

3 - 1 分析の概要

以下の分析を実施した。

1) 基本的分析

基本的データとして 学年および学内・学外者の度数、項目内容と全学の項目別平均値と標準偏差、2004 年度との比較、学部別の回答者数と履修者数の度数、回答者数 / 履修者数の比率(%)、2004 年度との比較、各学部の項目別平均値と標準偏差、2004 年度との比較を算出した。

2) 学部間の違い

学部間の差を検討するため、アンケートの「 . 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。」(P.8 参照。以下「総合評価」とする。)の各質問項目について、平均値の差の検定(一要因の分散分析、多重比較)を行った。

3) 規模別群の間の違い

規模別(回答者 50 名以下、51 ~ 100 名、101 ~ 150 名、151 名以上)に群分けし、規模別群間の差を検討するため、「総合評価」の各質問項目について、平均値の差の検定(一要因の分散分析、多重比較)を行った。

4) 項目の関連

質問項目間に関連があるか検討するため、各質問項目間でピアソンの相関係数を算出し、無相関の検定を行った。

5) 学年間の違い

学年間の差を検討するため、「総合評価」の各質問項目について、平均値の差の検定(一要因の分散分析、多重比較)を行った。

3 - 2 提供データについて

1) 各学部等 F D 委員会に提供したデータ

上記「3 - 1 分析の概要」に掲げた 1) から 5) すべてのデータ。ただし、「1) 各学部の全質問項目に関する平均値および標準偏差」は、当該学部のもののみを提供した。

2) 各教員に提供したデータ

アンケートを実施した科目に関して、以下の 3 種類のデータを送付した。

フェイス : 科目コード、科目名、開講曜日・時限、担当者、教室、受講者数(履修者数)、回答数

各質問項目に関する、単純集計結果(回答者の平均値、度数に関する積み上げ棒グラフ)

学生による自由記述のリスト

3 - 3 統計的分析について

本報告書を読む上で必要な、統計的ことさらにに関する説明を以下にまとめた。(アルファベット順)

1) 平均値の比較：一要因の分散分析

- ・ あるグループ間(学部間など)に統計的に有意な差があるか検討するための分析方法のこと。グループ全体のどこかに差があるということがわかるので、どのグループ同志に差があるかを検討するためには、事後検定として多重比較(本分析では tukey の HSD)を実施する。

2) 相関分析

- ・ a および b という項目があった場合、a に 1 (低い得点)をつけた人が皆 b にも 1 (低い得点)をつければ、相関は強くなる。
- ・ 二つの項目の数値が同じ傾向の動きをするほど相関は強くなる。まったく同じ動きであれば、相関係数は 1.0 となり、真逆の動き(一方に 1 をつけた人はもう一方に 5 をつける)をすれば、-1.0 となる。まったくばらばらであれば、相関係数は 0.0 となる。

3) 統計の有意性

- ・ 統計の結果(平均値の差など)が、確率論的に確かめられたもの。たとえば“ $p < .05$ ”と表記されている場合は、偶然で起こるとしたら、5%の確率、すなわち 20 回に 1 回しかその結果(平均値の違いなど)が起こらないので、その結果には統計的に意味があると考ええる。

4) 有意差

- ・ あるグループ間の数値的な差(平均値や度数など)について統計的に検討した結果、ある程度の確率(例:偶然では 5%、すなわち 20 回に 1 回しか起こらないというほどの差がある)で、そのグループ間に差があると確かめられたもの(上述の“3) 統計の有意性”もあわせて参照のこと)。

4 . 全学総評

全学総評は、全学の集計データと、5章にまとめられている学部等総評をもとに、実施委員会が執筆した。

4 - 1 全学総評の要点

学生からの授業評価は、全体的におおよそ良好な評価であった。

回答者数 / 履修者数の比率が低く、日常の授業の出席率の問題が認識された。

講義時間以外で、学生の予習復習にける時間が圧倒的に少ない。

学部間で授業評価に有意な差はあるものの、評価の低い学部においても絶対的な水準では低くはない。

授業技術に関しては、板書の仕方に関する否定的な意見が多い。

学生の講義に対する「満足度」は「聞きやすい話し方」、「授業のねらいの明確さ」、「授業内容の明確さ」、「新しい考え方・発想」、「基本的知識」、「わかりやすさ」、「授業全体の目標の明確さ」、「学問的興味」に関連する。

授業規模では50名以下の授業の評価が最も高く、大人数授業の評価は低い。

1年生から4年生と学年が進行するに従って、授業に対する評価は上る。

多くの教員は、このアンケートから授業改善へのヒントを得たと認識しており、今後の授業改善に関する課題が明示された。

ここまでの要点に関しては、2004年度と全く同じ傾向であった。

5「十分な静粛性が保たれた」以外のすべての項目で、2004年度から2005年度にかけて、有意な得点の上昇が示された。この点からは授業改善の効果があがっていると考えることができる。

しかし、同時に授業改善に関して、教員個人レベルでは解決できない問題についての意識化も同時に進みつつあり、大学全体としてのFDへの取り組みの必要性が指摘された。

4 - 2 集計データから見られる結果のまとめ

1) 2004年度と2005年度のデータの比較

表3(資料編P.72。P.16に再掲)に2004年度と2005年度のデータについて項目の全学平均値の比較を示した。全体の得点の傾向は、平均値にして最大0.07の違いで04年度と05年度のデータに大きな変化はない。しかし、5「十分な静粛性が保たれた」(得点に有意差なし)を除いて、すべての項目の平均値の上昇は、統計的に1%水準で有意である(偶然による誤差ではない)。この得点の上昇に関しては、教員の問題の意識化とその改善を学生が評価したと考えて妥当であろう。また、学部により、項目の得点の上昇が顕著であった学部、そうでなかった学部も存在する。原因の解明は容易ではないが、教員の授業改善への意識化が進んだことが評価の向上に結びついていることが期待される。

そのほか、授業評価の得点に関する分析に現れた傾向は、2004年度と全く同様であった。

このことは、調査における測定の精度の妥当性と信頼性を示すものである。

しかしこのことは同時に、授業評価の傾向は、1年という短期間では、大きく変化しないことを示しており、頻繁に評価を繰り返すことは、教育改善の効果が見えにくくなり、徒労感、俗に言う「FD 疲れ」を招く結果にもなりかねない。この点は今後、効果的な授業評価を長期間継続するためには、十分な注意が必要な点となろう。

表3 2005年度項目別平均値および2004年度との比較(全学)

項目	2005			2004		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1 授業全体を通じての出席率(5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	59,467	4.41	0.85	60,495	4.37	0.9 **
2 この授業に積極的に参加した	59,476	3.6	1.07	60,501	3.58	1.09 **
3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	59,407	2.72	1.06	60,449	2.65	1.04 **
4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	59,359	2.81	1.13	60,375	2.72	1.11 **
5 シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	59,152	3.22	1.08	60,190	3.18	1.08 **
6 授業の予習復習等に毎週当てた時間(5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	59,361	1.61	0.89	60,388	1.56	0.84 **
この授業の進め方は...						
1 聞きやすい話し方だった	59,460	3.7	1.15	60,498	3.68	1.16 **
2 各回の授業内容の量が適切だった	59,438	3.77	1.01	60,448	3.72	1.02 **
3 各回の授業のねらいは明確だった	59,403	3.76	1.03	60,404	3.71	1.04 **
4 各回の授業内容は明確だった	59,324	3.77	1.03	60,335	3.73	1.05 **
5 十分な静粛性が保たれた	59,327	3.68	1.18	60,342	3.68	1.2
6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	59,277	3.61	1.09	60,296	3.55	1.12 **
7 板書のしかたが適切だった	59,094	3.1	1.13	60,061	3.04	1.13 **
8 映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	58,824	3.39	1.26	59,776	3.29	1.29 **
9 教員は授業の準備を周到に行っていた	59,243	4.01	0.93	60,261	3.98	0.94 **
この授業の内容は...						
1 新しい考え方・発想に触れた	59,389	3.81	1.01	60,424	3.74	1.02 **
2 基本的知識が得られた	59,387	3.83	0.97	60,422	3.8	0.98 **
3 テーマが現代的な意味を持っていた	59,351	3.83	1.04	60,385	3.81	1.04 **
4 最新の学問成果に触れた	59,258	3.4	1.04	60,319	3.35	1.04 **
総合的にみて、この授業は...						
1 わかりやすい授業だった	59,370	3.65	1.13	60,409	3.61	1.15 **
2 授業全体の目標が明確だった	59,353	3.71	1.04	60,400	3.65	1.04 **
3 学問的興味をかきたてられた	59,353	3.51	1.13	60,395	3.45	1.14 **
4 この授業を受けて満足した	59,349	3.62	1.13	60,394	3.56	1.15 **

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

2) 学年および学内・学外者の度数 (資料編 P.71 表 1、2、図 1。表 1、2 は下に再掲)

アンケートに回答した学年の人数は、表 1 に示した通りである。このデータからは、4 年生の比率は少ないが、それに対して 1,2,3 年生がほぼ同じ比率で講義を受講していることがわかる。この事実は、将来の履修上限の設定などに参考になるデータである。

学内者に対する学外者の比率は、0.79%と極端に少なく、今後の単位互換制度などを考える上で参考になるデータになるう。

表 1 学年の度数および%

学年	度数	%
1 年	17,702	29.70
2 年	18,699	31.37
3 年	15,339	25.73
4 年	6,018	10.10
不明	1,852	3.11
計	59,610	100.00

表 2 学内者・学外者の度数および%

	度数	%
学外	469	0.79
学内	59,141	99.21
計	59,610	100.00

3) 各項目に関する全学平均値から見たまとめ (資料編 P.72 表 3、図 2。表 3 は P.16 に再掲)

全学の集計データの平均値から、以下の各点が明らかになった。

講義に出席している学生の授業への出席率は高く、おおむね積極的に参加している。

しかし、学生は講義時間以外で予習復習に充てる時間はほとんどなく、履修の準備、発展的な学習の不足については自覚している。

授業の進め方、教材教具の使用などに関しては、板書について改善の余地はあるものの、その他の点についてはおおむね良好な評価が得られた。

授業の内容については、新しい考え方・発想の提示、基礎的内容、応用的な内容いずれも高い評価を得た。それらに比較すると、最新の学問成果の提示については若干劣っている。

総合評価については、「分かりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」のいずれに対してもおおむね良好な評価を得た。

しかし、これらのデータはいずれも講義に出席している学生からの評価であり、回答者数/履修者数の比率をみると、アンケート結果に表れてこない授業に参加していない学生の動向、評価の把握と、こうした学生たちへの大学としての対策の必要性がクローズアップされた結果といえよう。

4) 各項目への学生の反応の分析とまとめ

アンケートは、4つの項目群から構成されている。「この授業へのあなたの取り組み方」、「この授業の進め方」、「この授業の内容」、「総合評価」である。

「この授業へのあなたの取り組み」について

1:「授業全体を通じての出席率」については平均値が 4.41 (2004 年度 4.37) であり、

おおむね出席率が70%を上回る(5:90%以上、4:70-89%)高い学生の自己評価であった。しかしこの点については、後に述べる回答者数/履修者数の低さを勘案する必要がある。また、半期の授業の後半にアンケートが行われたため、そこまで継続的に出席していた学生の回答であることを考慮する必要がある。

- 2:「この授業に積極的に参加した」については平均値が3.60(2004年度 3.58)であり、おおむね高い数値といえよう。しかしこの結果も上述した学生の反応であることを考慮する必要がある。
- 3:「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」についての回答の平均値は理論的な中央値3を下回る2.72(2004年度 2.65)であり、1、2に示された講義への取り組みの姿勢に比較して、全体的に否定的な学生の自己評価が示された。
- 4:授業をきっかけにして発展的な勉強をした」についても平均値2.81(2004年度 2.72)であり、講義の予習とともに復習、さらには発展的な学習へとつながっていない様子が示されている。
- 5:「シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った」については平均値3.22(2004年度 3.18)であり、若干肯定的な方向の回答であるが、肯定的否定的な反応が相半ばというところであろう。学生の評価からはシラバスの改善の余地はあると考えられる。
- 6:「授業の予習復習等に毎週あてた時間」については平均値1.61(2004年度 1.56)すなわち、1時間未満もしくはゼロ時間が相半ばしている反応である(2:1時間未満、1:0時間)。この結果は、3、4の結果をさらに鮮明な形で示した学生の反応であり、学生たちは講義時間以外での学習がほとんど行われていない実態が示された。

この項目群の平均値から読み取れる結果は、「過半数の学生は講義に継続的に出席していないが」(後述)「講義に出席している学生は、出席率もよくある程度積極的に授業に参加している。しかし、その講義に出席している学生たちでさえ、授業時間以外にはほとんど学習の時間は取っておらず、授業の準備や発展的な学習の不足をある程度自覚している」ことを示している。

またシラバスの学生からの評価は、やや肯定的である。

「この授業の進め方」について

- 1:「聞きやすい話し方だった」についての平均値は3.70(2004年度 3.68)であり、おおむね高い数値といえよう。
- 2:「各回の授業内容の量が適切だった」についての平均値は3.77(2004年度 3.72)であり、おおむね高い数値といえよう。
- 3:「各回の授業のねらいは明確だった」についての平均値は3.76(2004年度 3.71)であり、おおむね高い数値といえよう。
- 4:「各回の授業内容は明確だった」についての平均値は3.77(2004年度 3.73)であり、

おおむね高い数値といえよう。

5:「十分な静肅性が保たれた」についての平均値は3.68(2004年度 3.68)であり、おおむね高い数値といえよう。

6:「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」についての平均値は3.61(2004年度 3.55)であり、おおむね高い数値といえよう。

7:「板書の仕方が適切だった」についての平均値は3.10(2004年度 3.04)であり、評価は肯定的否定的相半ばである。

8:「映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった」についての平均値は3.39(2004年度 3.29)であり、やや肯定的な反応だった。

9:「教員は授業の準備を周到に行っていた」についての平均値は4.01(2004年度 3.98)であり、高い数値といえよう。

授業に出席している学生からの評価は、「話し方」「量」「ねらい」「内容」「静肅性」について、全学的な観点からはおおむね肯定的な評価である。「教科書・授業レジュメプリントや参考文献」「映像視覚教材」などについてもおおむね肯定的な反応であった。しかし、「板書」についての評価は、肯定的否定的相半ばで改善の余地がある。最後に「教員の授業の準備」については高い評価が示されており、授業に出席している学生には教員の熱意が伝わっているようである。

「この授業の内容」について

1:「新しい考え方・発想に触れた」についての平均値は3.81(2004年度 3.74)であり、おおむね高い数値といえよう。

2:「基本的知識が得られた」についての平均値は3.83(2004年度 3.80)であり、おおむね高い数値といえよう。

3:「テーマが現代的な意味を持っていた」についての平均値は3.83(2004年度 3.81)であり、おおむね高い数値といえよう。

4:「最新の学問成果に触れた」についての平均値は3.40(2004年度 3.35)であり、おおむね高い数値といえよう。

講義内容の「新しい考え方・発想」の提示や、「基礎的知識」「テーマの現代的な意味」などの基礎的内容、応用的な内容の両方に関して、肯定的な反応が得られている。しかし、それらの項目に比較すると「最新の学問成果」の提示は、やや得点が低く、学問内容にもよるが、講義内容についての毎年の更新についての検討も余地があろう。この点に関しては、「～概説」のように「最新の学問成果」にふれることが困難な講義もあり、数値の読み取り時に考慮する必要がある。

「総合評価」について

1:「わかりやすい授業だった」についての平均値は3.65(2004年度 3.61)であり、おおむね高い数値といえよう。

- 2:「授業全体の目標が明確だった」についての平均値は3.71(2004年度 3.65)であり、おおむね高い数値といえよう。
- 3:「学問的興味をかきたてられた」についての平均値は3.51(2004年度 3.45)であり、おおむね高い数値といえよう。
- 4:「この授業を受けて満足した」についての平均値は3.62(2004年度 3.56)であり、おおむね高い数値といえよう。

講義の「分かりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」のいずれに対しても3.5程度もしくはそれを上回る平均値を得ており、文字通り「おおむね良好」な結果といえる。

5) 回答者と履修者数の比率について(資料編P.73表4)

資格課程である学校社会教育・講座の71.48%以外は、すべての学部で50%台、もしくはそれ以下の数値であり、全学で43.50%と出席率の低さが際立っている。この傾向は、04年度と全く同じ傾向であった。昨年度も指摘したが、この分析では、選択科目、必修科目の別は、考慮されていないので、さらに詳しい分析と考察が必要ではある。しかし、全学的傾向の原因として可能性のあることは以下の各点である。

いわゆる保険登録の学生が多いこと。

講義期間中に履修をやめてしまう学生が多いこと。

出席しなくても単位認定される講義が多いこと。

上述したいずれのことが原因であるにせよ、全学の学生への教育責任という観点からは、対策を講じる必要がある。

「いわゆる保険登録の学生が多いこと」、「講義期間中に履修をやめてしまう学生が多いこと」に対する対策として、今年度から一部導入された履修上限の設定、GPA制度の導入は、こうした問題への1つの有効な対策となる可能性がある。今後の動向が注目される。また、「出席しなくても単位認定される講義が多いこと」の有無については、さらなる検証が必要である。

6) 「 . 総合評価」の平均値の学部間の違い(資料編 P.75 表5 ~ 表8)

- 1: 「わかりやすい授業だった」に関しては、学校・社会教育講座(3.86)、全カリ(3.75)、コミュニティ福祉学部(3.74)は比較的 평균値が高いグループを形成しており、理学部(3.39)が比較的 평균値が低い。
- 2: 「授業全体の目標が明確だった」に関しては、学校・社会教育講座(3.86)、コミュニティ福祉学部(3.75)は比較的 평균値が高いグループを形成しており、理学部(3.57)、法学部(3.62)が比較的 평균値が低いグループを形成していた。
- 3: 「学問的興味をかき立てられた」に関しては、コミュニティ福祉学部(3.68)が比較的 평균値が高く、理学部(3.34)、経済学部(3.40)が比較的 평균値が低いグループを形成していた。
- 4: 「この授業を受けて満足した」に関しては、学校・社会教育講座(3.76)、コミュニティ福祉学部(3.75)は比較的 평균値が高いグループを形成しており、理学部(3.45)が比較的 평균値が低い。

学生の授業に対する総合評価を学部間で比較すると、相対的に学校・社会教育講座、コミュニティ福祉学部の評価が高く、理学部の評価が低いことが示された。しかし、評価の低いグループの平均値はいずれも3点を上回る数値であり、絶対的な評定基準としては、評価が低いわけではない。

2004年度との比較では、学校・社会教育講座の得点高さは2004年度と同様であるが、コミュニティ福祉学部の相対的順位が全体として上昇している。

また、総合評価の高低は、その学問領域における講義科目の位置づけ、学問の性質による講義内容の違いなども考慮しなければならないであろう。

7) 「 . 総合評価」の平均値の授業規模による比較(資料編 P.77 表9 ~ 表13)

授業規模を50名以下、51~100名、101~150名、151名以上の4群に分けて、「 . 総合評価」の平均値を比較した。

- 1: 「わかりやすい授業だった」に関しては、50名以下(3.72)の平均値が最も高く、151名以上(3.58)の平均値が低かった。
- 2: 「授業全体の目標が明確だった」に関しては、50名以下(3.81)の平均値が最も高く、151名以上(3.63)の平均値が低かった。
- 3: 「学問的興味をかき立てられた」に関しては、50名以下(3.62)の平均値が最も高く、151名以上(3.42)の平均値が低かった。
- 4: 「この授業を受けて満足した」に関しては、50名以下(3.74)の平均値が最も高く、151名以上(3.52)の平均値が低かった。

本来、授業規模とは無関係であるはずの授業の「わかりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」にも、授業規模の影響が明確に示されていることが興味深い。

共通して示された結果は、いずれも50名以下の授業で評価が高かったことであり、この傾向は2004年度の結果と全く同様であった。

授業の「わかりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」の高いものが50名以下の授業に多いという可能性もあるが、その可能性よりも授業規模、すなわち、講義の環境がそのまま総合評価に反映されていると考えることが妥当であろう。

このことは、教室規模、授業規模を考える上で参考にすべき数値である。

8) 項目間の相関(資料編P.78表14)

1~4の授業の総合評価が、他の項目と0.6以上の高い相関を示したものを取り上げると、以下のとおりである。

1「わかりやすい授業だった」と

- 1「聞きやすい話し方だった」.695
- 2「各回の授業内容の量が適切だった」.612
- 3「各回の授業のねらいは明確だった」.679
- 4「各回の授業内容は明確だった」.724
- 2「基本的知識が得られた」.641
- 2「授業全体の目標が明確だった」.773
- 3「学問的興味をかきたてられた」.702
- 4「この授業を受けて満足した」.787

2「授業全体の目標が明確だった」と

- 3「各回の授業のねらいは明確だった」.756
- 4「各回の授業内容は明確だった」.747
- 2「基本的知識が得られた」.641
- 1「わかりやすい授業だった」.773
- 3「学問的興味をかきたてられた」.684
- 4「この授業を受けて満足した」.740

3「学問的興味をかきたてられた」と

- 4「各回の授業内容は明確だった」.613
- 1「新しい考え方・発想に触れた」.641
- 2「基本的知識が得られた」.634
- 1「わかりやすい授業だった」.702
- 2「授業全体の目標が明確だった」.684
- 4「この授業を受けて満足した」.804

4「この授業を受けて満足した」と

- 1「聞きやすい話し方だった」.621
- 3「各回の授業のねらいは明確だった」.661
- 4「各回の授業内容は明確だった」.688

- 1 「新しい考え方・発想に触れた」.637
- 2 「基本的知識が得られた」.665
- 1 「わかりやすい授業だった」.787
- 2 「授業全体の目標が明確だった」.740
- 3 「学問的興味をかきたてられた」.804

この結果から、学生の講義に対する「満足度」は「聞きやすい話し方」、「授業のねらいの明確さ」、「授業内容の明確さ」、「新しい考え方・発想」、「基本的知識」、「わかりやすさ」、「授業全体の目標の明確さ」、「学問的興味」に関連することが明らかになった。

この相関係数のパターンは2004年度と全く同じであった。

今後の授業を考える上で、参考になる資料となろう。

9) 「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較(資料編P.79表15～表18)

表15～表18は「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較を示したものである。

いずれの項目においても、4年生、3年生、2年生、1年生の順序に得点が高い。またそれぞれの平均値の間には統計的な有意差もある。この傾向は2004年度の結果と全く同様であった。この原因に関して可能性のある解釈としては、2004年度と同様、以下の点が考えられる。

1,2年生においては、必修科目が多く、学生の動機づけが低いこと。

学年が上昇するに従って選択科目も多くなり、学生の動機づけが高まること。

選択必修の別にかかわらず、学年が上昇するに従って、例えば大学における教育効果の現れとして、内発的動機づけ、講義への自己関与が高まり、授業評価が高くなっていること。

4 - 3 担当教員からの所見票に対するまとめ

以下は、学部等総評にある担当教員からの所見票に関する記述に関して主要なものをまとめたものである。

1) 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」に関して、各学部の記述から共通して見いだされる点を列挙すると、以下の通りである。学生からの授業評価がおおむね高得点だったことをうけて、多くの教員が自身の講義に対する学生の評価が適切かつ好意的であったと受け取っている。また、学生からの授業評価を受けて、講義に対する教員の工夫についての具体的な言及しているものも多かった。さらに、学生の予習復習等の時間を増やそうとする試みに言及する学部も複数あった。次に、教室の大きさ、受講生数などの授業評価へ与える影響に関する言及も多かった。最後に、質問項目内容に関して、授業科目の内容、授業の進め方などにより、妥当でない項目の是正に関する要望も少なからずあった。

2) 自由記述欄に対する担当教員の所見のまとめ

自由記述欄に対する担当教員の所見では、まず、板書や話し方など授業技術に関する言及が多かった。読みやすい板書の方法、有効なプリント、パワーポイントの使用法に関して教員が改善に向けて多くの学部で努力している様子が読み取れる。、それと関連して、学生のノートテイキングの能力に関する問題の指摘もあった。

次に、私語の多さに関する問題の指摘も多かった。この点に関しては、教員と学生の双方の問題としてとらえる必要性が多く述べられた。

3) 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

2004 年度と同様、パワーポイントの提示方法、プリントの配布などに関する言及が多かった。また、板書については、限界はあるものの、多くの教員が改善を検討している。さらに、講義中の私語への対処をあげている学部も少なくない。

しかし、一方で、個人的な教員側の改善への努力だけでは解決できない学生側の問題、教育設備、カリキュラムに必要な各科目の講義内容の問題などが、限界として受けとめられている様子が見て取れる。

4) 学生からの意見(自由記述)の集約

肯定的評価として多い意見の集約

まず、ビデオ、パワーポイントなどの視聴覚教材を使用した授業への評価が高いこと、コメントペーパーの活用など、対話型の講義への肯定的評価が高いことがあげられる。それ以上に、教員の人柄、熱心さに関する記述も多い。これは本学の特徴の大きなポイントであろう。また、V-Campus や Chorus の利用など IT 技術の活用に関する言及も少なくない。今後の利用の広がりが期待される。

否定的評価として多い意見の集約

板書、授業の進め方、パワーポイントの進め方の早さ、分量など授業技術に関する点と講義の難易度などに問題点が多く指摘された。

また、教員に対する学生からの誹謗中傷とも考えられる自由記述についての言及もあり、大学として、授業改善への真摯な取り組みを進めるため、学生をも含めた FD に関する意識改善の必要も考えていかねばならない。

5) 今後の授業改善に向けた課題の提示

今回の授業改善に向けた課題の提示をみると、

- ・板書などの授業技術への改善への必要性和同時に、個人的努力の限界の指摘
- ・教材提示の工夫の必要性和同時に、丁寧な教材提示によって学生がノートをとらなくなる問題の指摘
- ・出席率の低さのわりに、「熱心に講義に参加している」という学生の自己評価している事実から、学生の学習が講義場面だけで完結してしまい、発展的な学習につながっていない状況の把握と問題の指摘

・学生は「私語が悪い」とは考えながら、全体として私語がなくなる現実など、実態の改善の必要性の指摘と同時に、そうした問題に内在する、より大局的な大学教育における構造的問題に言及するものが少なからずあった。

こうした点は、各教員が真剣に解決策を模索し始めた証左ではあるが、また一方で、今後、解決への糸口が見いだせない場合、教員側の徒労感、無力感を高め、FD 疲れの原因ともなりかねない状況のはじまりともいえる。こうした FD 疲れを起こさせないためにも、講義における問題点と、授業改善の責任を単に個々の教員に帰することなく、学科、学部、大学として、問題を解決していくためのハード面、ソフト面でのサポートや、教育効果を上げるための方策についての情報の共有を進めていく必要が今後、大きくなって行くであろうことが考えられる。

5 . 学部等総評

学部等総評は、各科目の集計結果および各教員の執筆した所見票をもとに、各学部等 F D 委員会が執筆した。

各学部等総評の構成は、原則として以下のとおりである。

- 1 . 集計データからみられる結果のまとめ
- 2 . 担当教員からの所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」, 「自由既述欄に対する担当教員の所見」, 「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
- 3 . 学生からの意見の集約（「肯定的評価として多い意見」, 「否定的評価として多い意見」の集約）
- 4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

5 - 1 文学部

1 . 集計データからみられる結果のまとめ

全 25 箇条のアンケート項目のうち、昨年度との比較が可能なアンケート項目は 23、このうち統計的に意味のある差がみられるのは 11、すなわち、 1（出席率）、 2（積極性）、 4（授業を契機とした発展的勉強）、 6（予習・復習時間） 1（話し方）、 4（授業内容の明確性）、 5（静粛性）、 7（板書）、 8（効果的な映像視覚教材の使用） 1（わかりやすさ）、 4（満足度）である。

1 - 1 学生自身の授業への意識・姿勢

主に学生自身の授業への意識・姿勢を示すアンケート 群について、1（出席率） 2（積極性）がわずかに下降し、4（授業を契機とした発展的勉強） 6（予習・復習時間）は上昇している。

1 - 2 講義技術への評価

主に講義技術への評価を示すアンケート 群について、1（話し方） 4（授業内容の明確性） 5（静粛性） 7（板書）がいずれも下降し、8（効果的な映像視覚教材の使用）が上昇している。

1 - 3 講義内容への評価

主に講義内容への評価を示すアンケート 群について、1（わかりやすさ） 4（満足度）がいずれも下降している。

1 - 4 まとめ

- 1) 学生自身の授業への意識・姿勢については、 2（積極性）が全学標準を下回り、 6（予習・復習時間）が全学標準に並んだ。その他の項目は全学標準を上回り、統計的に意味のある差はあられないが上昇傾向にあって、文学部学生の授業への意識・姿勢が改善されていると解釈できる。

2) いっぽうで、講義技術・内容への評価は、8(効果的な映像視覚教材の使用)をのぞいて昨年度よりも下降し、とくに 3(各回の授業の狙い)、3(テーマの現代性)、4(最新の学問成果への接触)は全学標準を下回っている。3(テーマの現代性)、4(最新の学問成果への接触)への評価は文学部が展開する科目群の性格とも関連するであろうし、7(板書)をのぞいて評価の平均値は3.5を越えており、ただちに「憂慮すべき事態」であるとはいえないであろう。しかし、今後、その動向を注意深く観察する必要があると考えられる。

2. 担当教員からの所見票のまとめ

2-1 授業評価に対する担当教員の所見まとめ

昨年度と大きな差はない。学生の受講態度への評価は概ね良好であった。

2-2 自由記述欄に対する担当教員の所見のまとめ

昨年度と大きな差はない。

- 1) 学生の生の声が聞けて参考になった。
- 2) 自由記述欄の記述の少なさへの懸念。

2-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

板書・話し方等の授業進行のための技術的要望について、改善を約束している。

3. 学生からの意見(自由記述)の集約

3-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

- 1) ビデオ・テープ・OHP、CDなどの視聴覚教材を使用した授業への評価が高い。
- 2) コメントペーパーの採用など、対話型の講義への肯定的評価が高い。

3-2 「否定的評価として多い意見の集約」

- 1) 板書方法への不満。
- 2) 講義の難度。
- 3) 一部の講義に、受講生の私語の多さが指摘されている。

4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

講義技術への評価を示すアンケート 群のうち、8(効果的な映像視覚教材の使用)が上昇しているのは、学生からの意見(自由記述)でビデオ・テープ・OHP、CDなどの視聴覚教材を使用した授業への肯定的評価と対応する。これは昨年度に学生からの要望が多かった8(効果的な映像視覚教材の使用)について、教員が配慮した結果であろう。こうした教員の授業改善の努力が、学生の授業への意識・姿勢、すなわち4(授業を契機とした発展的勉強)、6(予習・復習時間)の上昇に寄与したとも判断できる。

いっぽうで、教員の所見には、学生の指摘を理解しかねるというもの、全員の要望に応えることの難しさを指摘する声も多い。もとより、教員個々に教育効果論・講義技術論があり、カリキュラム全体の中での講義個々の位置づけも異なる。レジュメ使用・配付、出席確認の有無、そして学生から要望の強い視聴覚教材の使用についてもそれが効果的であるかどうかは講義の種類にもよる。さらに否定的評価の多い板書についても、小学校～高校で行われているような板書は、大学の授業にはなじまない場合が多い。FD は、学生の「要望」を無批判に受け入れることではない。教員には、大学の講義の内容・達成目標を学生に理解させる努力が必要であろう。

また、学生が授業の予習・復習にかかる時間が極めて少なく、それにもかかわらず出席率、積極性などの自己評価が高いことが注意される。さらに、学生からの否定的評価として、講義の難度をあげるものも多い。これらは、学生が大学の授業に対してもっているイメージを明確に伝えている。すなわち、大学の授業はそれのみで完結するものである、というものである。今後FDをすすめていく上で、学生のこうした大学の授業に対するイメージを共有しておくことは非常に重要であろう。

以上を前提とし、以下に短期的な授業改善に向けた課題を列記する。

- 1) 話し方：学生の要望に応え分かりやすくする事が望まれる。
- 2) 講義内容について：学生の要望は多様であるが、シラバスや初回の授業において該当講義の意図を説明し、理解を求めることが必要であろう。
- 3) 科目等履修生・5 大学単位互換学生など、本学以外の受講生に対して、より丁寧な受講案内の必要性が感じられる。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較（文学部）

項目	2005			2004				
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD		
この授業へのあなたの取り組み方について...								
1	授業全体を通じての出席率(5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	9,139	4.42	0.82	9,380	4.46	0.77	**
2	この授業に積極的に参加した	9,136	3.58	1.05	9,375	3.61	1.02	*
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,125	2.78	1.05	9,377	2.75	1.00	
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,118	2.91	1.12	9,357	2.85	1.07	**
5	シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	9,081	3.37	1.06	9,334	3.37	1.02	
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間(5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	9,117	1.61	0.89	9,364	1.58	0.83	*
この授業の進め方は...								
1	聞きやすい話し方だった	9,139	3.71	1.15	9,378	3.81	1.11	**
2	各回の授業内容の量が適切だった	9,137	3.83	0.97	9,373	3.84	0.95	
3	各回の授業のねらいは明確だった	9,126	3.75	1.03	9,366	3.77	0.99	
4	各回の授業内容は明確だった	9,111	3.78	1.02	9,354	3.83	0.98	**
5	十分な静粛性が保たれた	9,120	3.92	1.12	9,359	4.07	0.99	**
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,105	3.72	1.06	9,350	3.75	1.03	
7	板書のしかたが適切だった	9,094	3.14	1.12	9,324	3.19	1.09	**
8	映像視覚教材(ビデオ, OHP, パワーポイントなど)の使用が効果的だった	9,007	3.47	1.27	9,207	3.38	1.24	**
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	9,096	4.07	0.90	9,346	4.09	0.87	
この授業の内容は...								
1	新しい考え方・発想に触れた	9,130	3.86	0.99	9,368	3.89	0.97	
2	基本的知識が得られた	9,131	3.84	0.96	9,369	3.87	0.93	
3	テーマが現代的な意味を持っていた	9,124	3.56	1.09	9,364	3.59	1.06	
4	最新の学問成果に触れた	9,110	3.28	1.04	9,358	3.29	1.04	
総合的にみて、この授業は...								
1	わかりやすい授業だった	9,126	3.66	1.12	9,370	3.75	1.08	**
2	授業全体の目標が明確だった	9,125	3.73	1.03	9,369	3.76	1.00	
3	学問的興味をかきたてられた	9,124	3.59	1.12	9,365	3.62	1.09	
4	この授業を受けて満足した	9,121	3.68	1.12	9,366	3.72	1.08	*
学部等による設問								
1	この授業の教室の大きさは適切だった	8,707	4.05	1.06	2005 年度に新設した設問のため、比較分析はなし			
2	この授業の受講者数は適切だった	8,698	3.99	1.01				

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 2 経済学部

1. 集計データからみられる結果のまとめ

2004年度の集計値と比較することがどの程度有意義であるのかは不明である。回答者である受講生は毎年変わるし、開講時間帯・履修順序・教室環境などにより学生の講義評価は異なるからである。だが、他に適切な基準値が考えられないので、2004年度の数値と比較してみたい。

全体としてみると、ほとんどの項目で昨年度よりも数値が改善していること、しかし、昨年度との差は小さく、数値の傾向が極めて似ていることが分かる。このことは、学生の受講態度・教員の講義努力とも改善しているが、講義全体に対する評価は前年度と同じ傾向となっていることを示唆している。

出席率(設問 1)が4.15から4.25へ、積極的参加度(設問 2)が3.53から3.60へと上昇していることは、学生の講義態度が改善したことを示唆しているし、教員の講義改善が出席率の改善をもたらしている可能性がある。

総合的な満足度(設問 4)が3.45から3.54へと上昇していること、その標準偏差が1.18から1.14へと小さくなっていることは、多くの講義において満足度が上昇しただけでなく、全体の「底上げ」がなされていることを示しており、積極的に評価してよい。また、ほとんどの項目において数値が改善していることも、経済学部として満足している。

数値が高い項目は 群を除くと、「教室の大きさ」(1、3.98)「教員の講義準備」(9、3.91)「基本知識習得」(2、3.79)「テーマの現代性」(3、3.79)などであった。経済学部は大規模授業問題が長年の課題であったが、この点の満足度が高いことに安堵している。

一方、数値が低い項目は「予習復習」(6、1.72)「十分な準備」(3、2.80)「発展的勉強のきっかけ」(4、2.88)などである。これらの設問は、各科目の目的やカリキュラム上の位置づけにより、学生の評価が異なって当然だと思われるので、低いことが問題であるわけではない。だが、講義の改善のために工夫の余地があることを示唆している。

大幅な改善(0.1ポイント以上)を見ているものとして「シラバスは役に立った」(5)「予習復習時間」(6)「映像視覚教材」(8)などであった。特に「映像視覚教材」については0.18ポイント増であり、顕著に改善している。これらは教員がパワーポイント・CHORUSなどを活用し、講義教材の改善に努力していることを反映しているものと考えられる。

数値が前年度より低下した項目は「十分な静粛性」(5、3.62 3.52)と0.1ポイント低下している。しかも、標準偏差も1.22 1.25ともともと大きかったものが一層大きくなっている。このことは静粛性が改善した科目がある一方で、静粛性が悪化した科目があることを推測させる。また、数値は悪くないものの、「聞きやすい話し方だった」(1)は前年度と同一(3.57)で改善されていない。

2. 所見票に対するまとめ

2 - 1 講義評価に対する担当教員の所見

講義評価に対する担当教員の所見を見ると「概して好評だった」「予想よりも高い評価

が得られた」「満足度が非常に高く安堵している」など満足度が高い結果に安堵し あるいは驚いているものが多かった。満足度が高かった要因として「基礎的知識を重視した」「周到な準備をしていた」「資料を充実させた」「リアクションペーパーを活用した」「パワーポイントを工夫した」などと自己分析している。講義の工夫について具体的に記述しているものも多かった。つまり、教員もさまざまな工夫をしていることが分かる。

また、講義の問題点として「抽象的な講義になってしまったかも知れない」「テキストやレジュメを使用しなかったことが低い評価につながっているのかも知れない」「現代的な課題と関連づけて説明する必要がある」など率直に反省しているものもあった。

学生の履修行動・受講態度について疑問を呈しているものもあった。「この科目を取得していることを前提に話を進めている」「4月の最初の講義から履修者の4分の1の出席者とはどういうことか」「積み重ねの知識が必要であるので、欠席すると理解が難しくなるのはやむを得ない」などが挙げられた。

2 - 2 自由記述欄に対する所見

自由記述欄に対する所見では学生の意見について「ひとつひとつのコメントに謙虚に耳を傾けたい」「今後の授業の励みにしたい」「大いに参考にしたい」と率直に反省し、講義の改善を約束しているものが大変多かった。

教員から見て、最も多かった意見は、学生の私語である。学生ばかりでなく教員も私語については深刻に受け止め・苦悩していることが分かる。大教室での講義は私語への不満が高く、深刻である。所見でも「私語をする学生が後ろの方に固まっている」「大教室であるために、私語をしている人物を1人ずつ注意することができない」と私語の取り締まりに苦労している様子うかがえる。そして、「[私語をしないという]最低限のマナーを学生諸君は守って欲しい」といった学生に対する要望があった。私語の問題は教員と学生双方の協力のもとに改善していくべきものと考えられる。

レジュメ・資料・パワーポイントなどを使用することについて疑問を呈し、教育的配慮からノートテイキングを重視している教員も散見された。例えば「社会人になると、相手の話を聞きながらノート・メモを取る機会が多い。話を聞いてノートを取る能力を身につける必要がある」「詳しいレジュメを配布すると、ノートをとらずに済む安心からか、私語が多くなる」「本務校ではそのような[レジュメを増やして欲しいという]要望はない」「日本語にハンディキャップのある留学生の方が早くノートを取っている」などである。また、ごく一部の学生についてであると思われるが「講義を評価する資格のない学生もいるのではないか」という厳しいものもあった。

2 - 3 改善に向けた今後の方針

改善に向けた今後の方針では、重要点を繰り返す、レジュメ・資料の充実、適正な量のパワーポイントの準備、教科書の利用などを挙げるものが多かった。また、「今後はCHORUSなどインターネットを活用したい」というものもあった。つまり、より丁寧な講義を心がけるといふことである。また「私語を厳しく取り締まりたい」という声も多くあった。

板書については、多くの教員が苦労をしており、「字を大きく見やすくする」「板書を増

やす」「丁寧に書く」などと回答していた。だが、「私は字が下手なので、きれいに書くのは限界がある。多少は我慢して欲しい」というものもあった。

講義の内容については「理論と実社会との接点ガリアルに伝わるようにしたい」「扱うテーマが学問体系の中で占める位置を明らかにしたい」「ねらいがはっきり分かるようなテーマ設定をしていきたい」など学生の興味関心に即して専門的な知識を教授する工夫をこらす姿勢が見受けられた。

3. 学生からの意見の集約

学生からの意見の集約で多いのは「先生が優しい」「先生の人柄がよかった」「圧迫される感じがなかった」「温厚な人柄」「先生がかっこよかった」「とても暖かみのある先生だった」といった教員の人柄・人間的印象に対する評価である。学生は講義の内容だけでなく、教員の人柄が講義の印象を大きく左右することが分かる。このことは満足度が高いことと教育効果が高いことが乖離している可能性を示している。

「質問に丁寧に答えてくれた」「毎回レジュメを配ってくれる」「レジュメが丁寧」「小テストをやってくれた」など、学生の疑問・質問に丁寧に答える科目について敏感に反応していることがうかがえる。学生は丁寧に分かりやすい講義に対して満足を感じる傾向があるといっていよう。

だが、専門性の高い科目の場合、同一の科目において学生の評価が「緊張感がある素晴らしい講義」と「内容が難しい」と二極化するものも散見された。新しい知見に触れて感動している記述も少なからず見受けられ、学生が分かりやすさだけでなく、高度の専門的内容の講義も期待していることがうかがえる。教員の多くは最先端の研究動向を含めた水準の高い講義をしたいと望んでいる。それを求める学生が存在することは喜ばしい。だが、このことは講義の水準を、知的欲求の高い学生に合わせるべきなのかどうかという点で、教員にとって難しい対応を迫っているといっていよう。

また、昨年と同じ傾向として「板書が汚く読みにくい」「板書ばかりしている」「パワーポイントの切り替えが早い」「声が小さい」「音声が不明瞭」「先生が怒鳴りすぎ」などといった否定的意見が多く見られた。板書については教員の改善努力が必要であると思われる。また、「話し方」についても、アンケート選択肢 1 で見られたように改善していない。教員にとって「話し方」を変えることは極めて困難なことなのかも知れない。この点は、学部として問題意識を共有していくことで改善を図ることが求められている。

4. まとめ

全体として見ると、多くの学生は率直に講義を評価し、大多数の教員も日々講義に工夫をこらし、学生の要望に応えようとしていることが分かる。率直なところ、昨年度の評価が「予想よりも」高かったため、今年度は数値が低下することも予測された。その中で昨年度よりも評価が向上していることを率直に喜びたい。このアンケートがこの工夫を促したと考えることもでき、アンケートの実施は有意義であったといえる。

だが、個々の教員に対する評価を見ると、前年度と傾向が酷似しているものが多い。これは受講者数、必修・選択の度合、抽象性の度合などが個々の科目の特性に由来していること、

また、「話し方」「板書の仕方」など教員の表現力は容易に変えることができないこと、などが理由として考えられる。だが、このことは改善の余地がないことを意味するものではなく、新しい工夫が求められているようにも思える。その際、個々の教員の工夫を交流し、蓄積する方法を検討していくことが重要な鍵を握っているように思われる。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較（経済学部）

項目	2005			2004			
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
この授業へのあなたの取り組み方について...							
1	授業全体を通じての出席率(5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,631	4.25	0.89	7,247	4.15	0.99 **
2	この授業に積極的に参加した	7,642	3.60	1.07	7,255	3.53	1.11 **
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,633	2.80	1.06	7,255	2.67	1.05 **
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,620	2.88	1.12	7,245	2.79	1.12 **
5	シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	7,601	3.14	1.06	7,214	3.04	1.07 **
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間(5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,630	1.72	0.93	7,245	1.62	0.86 **
この授業の進め方は...							
1	聞きやすい話し方だった	7,640	3.57	1.21	7,258	3.57	1.20
2	各回の授業内容の量が適切だった	7,634	3.66	1.07	7,249	3.62	1.08 *
3	各回の授業のねらいは明確だった	7,632	3.71	1.05	7,244	3.64	1.08 **
4	各回の授業内容は明確だった	7,622	3.71	1.05	7,241	3.64	1.09 **
5	十分な静粛性が保たれた	7,614	3.52	1.25	7,241	3.62	1.22 **
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,606	3.53	1.10	7,243	3.51	1.14
7	板書のしかたが適切だった	7,572	3.13	1.17	7,218	3.09	1.19
8	映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	7,545	3.24	1.24	7,167	3.06	1.31 **
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	7,610	3.91	0.97	7,231	3.89	0.99
この授業の内容は...							
1	新しい考え方・発想に触れた	7,620	3.59	1.05	7,251	3.53	1.05 **
2	基本的知識が得られた	7,618	3.79	0.99	7,253	3.75	1.00 **
3	テーマが現代的な意味を持っていた	7,615	3.79	1.06	7,244	3.77	1.07
4	最新の学問成果に触れた	7,595	3.36	1.05	7,240	3.30	1.06 **
総合的にみて、この授業は...							
1	わかりやすい授業だった	7,616	3.57	1.16	7,250	3.51	1.21 **
2	授業全体の目標が明確だった	7,610	3.63	1.05	7,249	3.58	1.08 **
3	学問的興味をかきたてられた	7,613	3.40	1.14	7,248	3.31	1.16 **
4	この授業を受けて満足した	7,611	3.54	1.14	7,248	3.45	1.18 **
学部等による設問							
1	この授業の教室の大きさは適切だった	7,017	3.98	1.13	6,709	3.88	1.19 **

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 3 理学部

1. 集計データから見られる結果のまとめ

全体の傾向は昨年とほぼ同様で、Iの多くで全学の平均を上回った反面、II以下では全学の平均を下回った項目が多く見受けられたが、教員側の評価となるII以降の項目では、平均値はすべて3以上であることは評価できよう。

項目Iでは、I5のシラバス以外はいずれも全学の平均を上回った。中でも、出席率と予習・復習の時間でのちがいが昨年と同様に顕著であった。とは言うものの、予習・復習に費やす時間が1時間未満である状況は変わらない。わが身を振り返ると、学生時代はこんなものだったと思う。しかしながら、授業への出席率や勉学の時間のアンケート結果を見ると、現時点における社会からの要請に対して責任を全うしているとは言いがたい。学生にもっと勉強をしてもらえるようなかたちでの教員側の授業内容の改善が望ましいのだが、至難の業である。シラバスの記入に関して前年度と変わらない結果であったことから、さらなる注意の喚起が必要であろう。

項目II5の静粛性とII7の板書で全学平均を上回った。また、II6、7、8、9、III1、4で前年度を有意に上回ったことから、これらの点に関しては、理学部教員の改善が功を奏したといえる。

昨年度と同様に多くの項目で数学科の評価が高かった。この説明として、数学科独自の工夫に加えて、規模の小さい講義の方が評価が高いことが考えられる。板書、視覚教材の利用、基本知識の取得、テーマの現代的な意味、最新の学問成果に関しても、数学科は板書で基本重視なのに対して、生命理学科は視覚教材を使って、テーマの現代的な意味や最新の学問成果を強調するというように、学科の特徴が評価の違いに現れた項目もあった。学年間の違いも、昨年と同様にほとんどすべての項目で4年生の評価が高く、あとはおおむね1、2、3年生の順であった。項目IVすべてで、2年生の評価が1年生を下回ったことは学年に固有な傾向かもしれない。

2. 担当教員からの所見表に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

昨年度と同様に、所見を提出した多くの教員がアンケート内容を真摯に受け止めて、コメントを記述している。所見の記述量は、教員の個性の多様性を反映してか、3ヶ所すべてを埋め尽くしているケースから、ある記述欄を重点的に書いている場合と、さまざまであったが、少数ながらすべてを1行程度で記述した所見もあった。IIの授業の進め方については、板書と視覚教材の使用やレジュメの配布など、教員側の工夫が感じられた。板書で高い評価を受けている数学科の教員から、視覚教材の項目はなじまないとの指摘があった。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

学生のレベルが幅広くなったせいも、同一項目で相反する意見が述べられる、意見がまちまちなどと、対応に苦慮している状況が垣間見える。授業内容が多い、進み方が速いという指摘に対して、この科目は変えるわけには行かないとする所見がある一方で、レベル

を下げることを考慮中などと、多様な対応が見られた。プリントの配布は好評だが、本当にこれでよいのかという指摘が複数あった。前が空いているのに、うしろに座っていて字が見えないなどというのはいかがなものかというコメントに加えて、受講の心構えの解説が必要なのではないかという記述もあった。パワーポイントに関して多様な意見がある一方で、スクリーンが小さいという指摘があった。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

昨年度の評価を受けて、教員が改善策を実行した結果、II から V の 18 項目の中で、7 項目で有意な改善が見られたのに対して、評価が有意に低下した項目は皆無であった。これは、「授業評価アンケート」が機能したことであり、喜ばしい限りである。その一方で、授業への出席率の低さを始めとして、学生側の対応の指標になる項目 I で顕著な変化が見られなかったことから、教員側の多少の改善では、学生側の対応に変化を及ぼさない厳しい現実が浮き彫りにされた。昨年度に続いて、アンケートの実施方法、項目に関する問題点の指摘があった。

3 . 学生からの意見（自由記述）の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

わかりやすい、ていねい、熱心、おもしろいなどと、肯定的な評価として妥当な記述が多かった。技術的には、プリント、小テスト、V-Campus や Chorus の利用はおおむね好評であった。質問に対する対応の良さも肯定的な評価につながっている。分量が良い、興味が喚起されたという記述も散見された。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

量が多い、速い、むずかしいなど、熱心さのあまりの問題と思われる指摘が散見された。板書良しという記述もかなり見られる反面、量、スピード、見やすさ、書き方など板書に関する注文も多かった。声が小さい、聞きづらいという指摘もあった。私語が多い、発展的内容を、出席率が低い、時間内でという意見もあった。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

昨年度の第 1 回のアンケートで、学生の忌憚のない評価、意見を受けて、対応結果を問われる第 2 回のアンケートであったが、1 . の結果のまとめで述べたように、教員側の評価となる II 以降の 18 項目のうち 7 項目で有意な評価の上昇が見られたことは、アンケートを踏まえての教員側の改善努力の成果といえる。

学生の賛辞のみで、否定的評価がほとんどない科目も散見されたが、肯定的な意見にとともに、多くの科目で何らかの否定的意見が述べられていた。それらの中で、板書を見やすく、声を大きく、聞きやすく、私語を少なく、時間内でという指摘は異論なく改善が必要であるのに対して、授業内容の量、板書が視覚教材か、基礎重視か最新成果か、わかりやすいか、などという点に関しては、教員ごとに多様な考え方が述べられており、大学らしさが感じられた。

理学部だけの問題ではないが、アンケートに回答した学生の割合の低さ、すなわち、アンケートに答えた学生の授業の出席率が高いものの、全体での出席率の低さが目立った。アンケート時に欠席した学生の授業評価を受けた方がよいのか、そうだとするとどのような方法があるのかという問題がある。出席率が高い科目（数学科に多い）は評価が高い傾向にあるものの、全体として高くない点は議論の対象になる。理系の学部としては、低いのではないかとの印象があるが、調べてみないとわからない。予習・復習の時間とあわせて、現状でよいのか、改善するとなるとどのような方策があるかという問題は未解決である。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較（理学部）

項 目	2005			2004		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	2,875	4.62	0.74	3,308	4.64	0.69
2 この授業に積極的に参加した	2,877	3.76	1.11	3,306	3.82	1.09 *
3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,871	2.84	1.09	3,301	2.83	1.08
4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,872	2.95	1.13	3,295	2.88	1.10 **
5 シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	2,865	2.83	1.10	3,294	2.84	1.08
6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間）	2,869	1.98	1.00	3,299	1.97	1.00
この授業の進め方は...						
1 聞きやすい話し方だった	2,874	3.47	1.22	3,302	3.45	1.22
2 各回の授業内容の量が適切だった	2,875	3.50	1.14	3,300	3.52	1.12
3 各回の授業のねらいは明確だった	2,872	3.62	1.07	3,298	3.60	1.10
4 各回の授業内容は明確だった	2,869	3.62	1.09	3,292	3.60	1.13
5 十分な静粛性が保たれた	2,870	3.86	1.10	3,295	3.84	1.16
6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,865	3.48	1.15	3,297	3.40	1.17 **
7 板書のしかたが適切だった	2,865	3.18	1.20	3,297	3.11	1.22 *
8 映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	2,836	3.00	1.19	3,265	2.87	1.23 **
9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,862	3.90	0.98	3,291	3.84	1.02 *
この授業の内容は...						
1 新しい考え方・発想に触れた	2,872	3.69	1.06	3,300	3.59	1.07 **
2 基本的知識が得られた	2,873	3.74	1.04	3,300	3.71	1.06
3 テーマが現代的な意味を持っていた	2,869	3.52	1.07	3,300	3.52	1.08
4 最新の学問成果に触れた	2,866	3.31	1.09	3,297	3.24	1.08 *
総合的にみて、この授業は...						
1 わかりやすい授業だった	2,873	3.39	1.24	3,300	3.37	1.26
2 授業全体の目標が明確だった	2,871	3.57	1.08	3,299	3.54	1.10
3 学問的興味をかきたてられた	2,871	3.34	1.18	3,299	3.32	1.19
4 この授業を受けて満足した	2,870	3.45	1.19	3,298	3.40	1.19
学部等による設問						
1 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	2,597	3.88	0.98	3,035	3.80	1.03 **

注) 最小値=1、最大値=5 SD = 標準偏差

*の有意水準は、 $p < .05$ 、**の有意水準は、 $p < .01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 4 社会学部

社会学部では、昨年同様、総評を以下の通り学科ごとに記述することとするが、その前に、05年度集計データ結果に読み取れる社会学部の特徴的な差異に短く触れておきたい。

統計的にみて、全学的に「十分な静肅性」は昨年と同一だが、他の項目の評価は昨年度より上昇している。社会学部の場合、平均値は、 -3, 6は同一で、他は全学よりも下になるが、 -1、 -2、 -5、 -2については上回り、 -1の他は統計的に意味のある差が見られる。「総合評価」について、社会学部は比較的高い評価をうけているが、「学部の並び順」でいえば、昨年度と比較して、の全ての項目に関し、統計的に有意かは不明だが、より上位にあることがわかる。それと、「規模別群の比較」に関していえば、全学の場合、総合評価の項目全てで、規模の大きさに反比例して評価は高いが、社会学では、「101から150」に特徴がみられる。 -1では、その規模の評価は、平均値が一番高く、他の項目でも、「~50」に次いで高いという傾向がある。さらに「学年間の差」の場合も、昨年度と同様で、全学的に学年が進むにつれて得点が高く、その傾向は社会学部も違いがない。相違は、1年生と2年生の場合と3年生と4年生の場合の開きが全学よりも大きいという特徴を示している。これらの統計的な有意性の有無は措くとして、ここでは指摘のみしておきたい。今後もその傾向が続くのであれば、科目内容と関連するのか教育効果によるのかどうかなど、理由を検討する必要があるかもしれない。

社会学科

1. 集計データからみられる結果のまとめ

昨年度の報告書では、他の社会学部2学科に比較して有意に低い値を示した項目は、 -2) 授業への積極的参加、 -3) 履修への準備、 -4) 授業内容の明確さ、 -7) 板所の適切さ、 -8) 映像視覚教材の使用、 -9) 教員の準備の周到さ、の6項目であった。本年度は、上記の項目に加えて、 -4) 発展的な勉強の有無、 -6) 予習復習に当てた時間、 -3) 授業のねらいの明確さ、 -3) テーマの現代性、 -4) 最新の学問成果に触れたか、 -2) 目標の明確さ、 -3) 学問的興味の発起、 -4) 授業への満足感の計14項目に増加した。

昨年度の報告書でも記述されたが、学科間の比較を、母集団の属性と授業自体の水準をどう区別してデータを扱えばよいかわからないなかで、上記項目の検証を行うことは大変困難であると思われる。そのうえで、学科のまとめを記述すると、「 . 授業への取り組み方」のいくつかの項目において、平均値が3.0未満の項目が見られ、学生の自発的な勉学への取り組みを考慮した授業展開が必要であるかもしれない。しかし、この点に関しては、本アンケート対象科目に、基礎演習や専門演習、卒論演習が含まれておらず、本アンケートの結果に隠された本学科の特徴であると思われる。また、「 . 授業の進め方」「 . 授業の内容」「 . 総合評価」に関しては、他学科よりは値が低いものの、平均値は3.0以上のものが多く、評価は良好であると思われる。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

昨年度同様、社会学科では、必修科目・選択必修科目をすべて調査対象とし、選択科目は教員が対象科目を選らんだ。

ほとんどの科目では、昨年度もアンケートを行っており、昨年度からの結果の変化から所見がまとめられている。例えば、授業の流れのわかりにくさを改善するためにレジメを作成したが、予習復習の時間がいっそう少なくなったなど、学生にとってどの形態がベストであるかを、いずれの担当教員も模索しているのが現状であると思われる。しかしながら、授業の概念に対する理解などの目的は、レポートや試験の結果から、大きな問題はなく、達成レベルに到達できていると考えられる。

また、「最新の学問成果にふれた」項目が低い数値であるのは、社会学科の展開科目の中には、「歴史的系譜や理論」を中心に行う講義も多いことが原因としてあげられる。板書の仕方」でほとんど板書を使用していない授業では値が低くなるなど、質問項目の妥当性および、その評価に対する捉え方も、科目によって様々であることが示された。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

映像視覚教材および板書への評価が、昨年度同様多く記述されており、前者へは肯定的な意見が多く、後者に対しては崩し字への指摘など、改善すべき点であることを自覚している所見が目立った。また、静粛性に対する評価も多く、授業への反応と私語の違いなど教員と学生で注意すべきレベルに差があることを認識された所見もみられた。

履修人数に適切な教室が割り当てられず、教室の適性に関する学生の自由記述も多かった。この問題は、学科だけの問題ではなく、大学全体の問題として記述しておきたい。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

上述の所見のまとめと重なるが、板書の利用法や、話し方、映像視覚教材の利用、静粛性の維持に対する方針などがあげられている。また、私語の問題や、予習復習への取り組み、目的意識の欠如、配布資料に対する努力など、学生に対しても自戒してもらいたい点が多く指摘されており、学生にこれらの点を伝える手段が、今後の検討課題の一つであると思われる。

3. 学生からの意見(自由記述)の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

学生からの肯定的な自由記述を教員が引用したものには、昨年と同様で、わかりやすさ、準備の周到さ、パワーポイントの利用、などがあつた。

3 - 2 「否定的意見として多い意見の集約」

2 - 2 と重なるが、板書の問題は多くの科目で指摘されている。しかし、受身一辺倒の授業となることや、レジメなどの配布資料に極端に依存した態度など、丁寧な板書や配布資料に対するマイナス面を指摘している教員も少なくなかった。また、授業の静粛性に対

するコメントもおおく、履修人数や教室規模などとの関係から、検証が必要であると思われる。

4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

昨年度も記述したが、ここの授業の運営上の課題としては、上述したように、板書法や話し方の改善などの記述的な問題、学生の関心をどうひきつけ、予習復習時間をいかに確保するかといった点が、課題としてあげられると思われる。その中で、予習復習時間の確保に対しては、文献紹介や小レポートの作成・提出などを所見に記述している教員もみられた。演習系の授業で主に行われている手法であるが、講義系の授業にこの方法が効率的に利用できるかは、今後検証する必要がある。

・産業関係学科

1. 集計データから見られる結果のまとめ

総合的評価を示す4つの項目「わかりやすい授業だった」、「授業全体の目標が明確だった」、「学問的興味をかきたてられた」、「この授業を受けて満足した」の4つの項目についての評価の平均値をみると、3.63、3.74、3.51、3.62となっている。これらの4つの平均値は全て「どちらともいえない」という中立的な評価である3を超えている。評価者の人数（最少で2,543人）の多さを考えると、これらの評価は中立的な評価である3との差が統計的に有意であると考えられる。このことは、総合的な評価において学生から中立的な評価以上に高い評価を得ているのだと考えることができよう。また、総合的評価を示す4つの項目に対する2005年度の評価の平均値は、2004年度の平均値（それぞれ3.37、3.49、3.15、3.26）を上回っており（それぞれ0.26、0.25、0.36、0.36増加した）総合的評価についての4つの項目についての学生の評価は、2004年度に比較してより高くなっていることが分かる。2005年度の評価の平均値の2004年度の平均値からの増加についても、統計的な検定は行われていないが、評価者の人数を考慮すれば、統計的に有意に増加しているのではないかと考えられる。これら4つの項目についての評価の平均値については、産業関係学科の平均値は、全て社会科学より大きく、現代文化学科より小さい。ただし、「わかりやすい授業だった」については、社会科学と統計的な差がないが、他の3つの項目については、統計的に有意な差が認められる。

授業の進め方についての9つの項目についての評価の平均値も、全て3を超えている。2004年度最も高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた」についての評価の平均値は4.03であり、昨年度の平均値3.84から増加している。昨年度には評価の平均値が3未満であった（2004年度の平均値2.90）「板書の仕方が適切だった」は、3.12となり、3を超えている。ただし、2004年度と同様に、他の項目に対する評価の平均値に比べてかなり低かったといわざるを得ない。学科間の評価の平均値の違いについては、総合的評価を示す4つの項目の場合と同様な傾向が見られる。

また、授業の内容についての4つの項目については、評価の平均値の全てが3.5を超えている。2004年度と同様に、「テーマが現代的な意味を持っていた」が4.02と最も評価が高く、この値は2004年度の平均値3.76よりも増加している。2004年度最も評価が低かった

項目である「最新の学問的成果に触れた」の評価の平均値は 3.50 と昨年度の平均値 3.26 より増加したが、2004 年度と同様に 4 つの項目の中では最も低かった。学科間の評価の平均値の違いについては、総合的評価を示す 4 つの項目の場合と同様な傾向が見られる。

学生の授業に対する取り組みを示す 6 つの項目については、項目により評価の平均値にかなり変動が見られる。「授業全体を通じての出席率」および「この授業に積極的に参加した」についての評価の平均値は、4.32 と 3.60 であり、ある程度高い値であり、授業への高い出席率また授業への積極的な参加がうかがわれる数値である。これらの平均値は昨年度(それぞれ 4.15 と 3.47) よりも増加している。他の 4 つの項目については、「シラバスは受講に役立った」の評価の平均値が 3.20 と 3 を超えているが、それ以外の 3 つの項目(「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、「授業の予習復習等に毎週当てた時間」)は、評価の平均値が 3 未満であり、特に、「授業の予習復習等に毎週当てた時間」の評価の平均値は 1.62 と極端に低く、「この授業に積極的に参加した」の評価の平均値とはやや異なる傾向を示していると考えられる。これらの 6 つの項目についても、学科間の評価の平均値の違いについては、総合的評価を示す 4 つの項目の場合とほぼ同様な傾向が見られる。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

教員の所見は、その記述が教員によってさまざまであり、これをまとめることは非常に困難である。ただし、多くの教員は、学生の評価を自分自身の授業への学生からの評価という意味で、真剣に受け止め、今後の授業に対するより一層の改善に結びつくものと受け止めているものと考えられる。ただし、授業の行われた教室の設備についての記述もあり、教室の設備によって評価が影響を受けているのではないかという可能性があるとも考えられる。これは授業を担当する教員側では如何ともし難いことであり、今後、教室の設備をより一層充実し、なるべく均一の条件にすることが望ましい。また、予習や復習の仕方など、学生に対する要求を、どのように教員(大学)から学生に伝えていくのか、今後検討が必要ではなからうか。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

教員は、学生の自由記述についての回答を真面目にまた真剣に記している。板書についての学生からの自由記述欄についての担当教員からの所見がいくつかあるが、これについては、学生側への要望も含まれており、これらを学生へどのように伝えるのかは今後の課題であろう。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ここでの担当教員の記述をみると、記述内容や様式は個々の教員により異なっているものの、多くの教員が、この授業評価アンケートの結果を、授業をよりよくするための具体的な改善すべき点に結びつけていることが分かる。

3. 学生からの意見（自由記述）の集約

3-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価として目立ったものを挙げると、レジュメ類を Web Site からダウンロードできる、授業の静粛性の保持が行き届いている、私語が少ない、双方向のコミュニケーションが行われているという、などがある、これらは、いわば担当教員の熱意や工夫を学生が評価しているということであると考えられる。担当教員の中には、担当する科目への評価を 2004 年度と比較して分析している例も見られた。

3-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価として目立ったものを挙げると、板書の字の誤字や脱字、字の大きさ、板書の字が読みづらい等、板書に関するものがかなり多い。また、授業の進行が速すぎる、パワーポイントの量が多過ぎるまた進行が速すぎる、あるいは、配付資料が細かすぎる等、内容が難しいという評価も見られる。また、教員からみて建設的なものが多いという意見があるが一方で、個人攻撃・非難のようなものが含まれていると指摘する教員もあり、「授業評価アンケート」とはどのようなものなのか、ということを経験した学生に十分理解させることの必要性をうかがわせられる。授業の静粛性が保持されたという評価がある一方で、私語が多いという評価もあり、授業によって評価にバラツキがあることが分かる。

4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

他の点に比べて、板書についての評価が最も問題になり、今後において最も留意すべき点ではなからうか。配布する資料、パワーポイントなどの利用方法や話し方など授業中の学生とのコミュニケーションをどのように組み合わせたらよいのか、それぞれの科目の内容なども考慮して、学生がいかに理解しやすいようなコミュニケーション方法をどのように見出していくのが課題である。授業の進行が速すぎる、あるいは、内容が難しいという評価については、予習や復習など学生の授業への出席の態度などをも含め、授業のありかた全体を考えた対策が必要ではなからうか。

. 現代文化学科

1. 集計データからみられる結果のまとめ

昨年度に比較して、ほとんどの項目で統計学的に有意といえる数値の上昇が見られた。社会学部は、昨年同様、統計的に見て、全体として高い評価を受けているが、とくに現代文化学科は相対的に他の学科よりも高くなっている。これは現代文化学科の科目内容の特色や、アンケート対象科目の履修者の規模や履修者 / 回答者数の比率の違いとも関連するのかもしれないが、詳しい分析が必要かと思われる。その他、履修者数 / 回答者数の比率は昨年度同様低かったが、履修者数が 50 人以下の場合、回答者がその半数以下、科目によっては一桁になっているためか、統計的な有意性は不明だが、そうした科目は高い評価を受けている。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

昨年度よりも授業評価の数値が上昇していることにしめされるように、多くの教員は一層良好な結果が得られたと受け取っている。昨年度の批評を真摯に受けとめ、教育効果を顧慮して講義技術の工夫、改善を行ったという手ごたえであろうか。同時に、学生数の減少が学生の授業態度に与える影響を指摘する教員もあり、全学で昨年度も指摘されていたように、教室サイズ、受講生数、受講生の質などにより授業評価がかなり左右されることは言うまでもない。「授業の予習復習等に毎週当てた時間」の項目に関して、参考文献の紹介による自習の誘いなどの試みはあったようだが、昨年同様、低い数値であるという反省もみられる。また、これも昨年同様だが、学問の性質、内容によっては、このような授業評価がなじまない科目もあるという指摘があった。確かに、抽象度の高い科目ほど、特に の項目や総合評価に低い数値が出ているといえ、そうした科目担当教員には想定内という受け止める者もいる。この場合、自由記述欄にも幾分細かな問いをたてることで、評価数値の高低だけではみえない側面が把握できるかもしれない。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

自由記述は少ないが、記載がある場合は肯定的であることを積極的に好感を持って受け止める教員が多い。否定的な記述としては、昨年同様、板書への注文、話し方についてのコメントが目立つ。あるいは、映像機器や板書の速度が速すぎ、ノートテイクが困難であることを指摘され、今後の課題とした教員もいる。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

評価の上昇が取り組む者にいい意味での励みを与えることを望みたい。06 年度以降、さらにその積み重ねとして、講義内容の更なる充実や講義技術の一層の向上を願う教員は少なくない。特に集計項目の の学生自身の評価が低いことを顧慮すると、教員と学生の双方向のコミュニケーションが講義改善の核といえるのだろう。

3. 学生からの意見の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

これも、昨年度と同じで、「わかりやすい」「授業のねらいは明確」に比較的高い評価が与えられている。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

「板書の仕方」、「私語」、「遅刻者に対する苦情」などが多いのは昨年同様である。数値としては若干の上昇がみられたとしても、統計的な有意はなく、今後の重要な課題のひとつであることが分かる。なお、上記のものと科目や履修者の相違からか、授業が難しいという声もあった。

4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

多くの教員が、比較的評価の高い「わかりやすさ」だけでなく、同時に、高度で興味深い学問の提示をめざすことで、学生の主体的な学習意欲を高め、授業に積極的に参加させることを課題にしている。それには、パワーポイントやOHCなどの映像機器使用の工夫が必要となってくるとみる教員も少なくない。ただ、ある教員は、パワーポイントのプレゼンテーションが後に残らず、教育効果上、プリントには及ばないのではないかという指摘をされていて興味深い。

昨年度、「板書のしかた」への改善を課題とされた教員は少なくなかったが、今回幾分の数値の上昇はみられたとはいえ、相変わらず低い。これも課題のひとつといえるが、映像機器との組み合わせを試みる必要があるであろう。実際、そのような所見もみられた。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較 (社会学部)

項 目	2005			2004		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1 授業全体を通じての出席率(5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,371	4.31	0.90	7,137	4.28	0.94
2 この授業に積極的に参加した	6,373	3.55	1.09	7,136	3.57	1.10
3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,364	2.68	1.04	7,129	2.64	1.03 *
4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,354	2.75	1.10	7,119	2.69	1.08 **
5 シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	6,334	3.20	1.05	7,095	3.18	1.05
6 授業の予習復習等に毎週当てた時間(5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,353	1.58	0.87	7,125	1.47	0.78 **
この授業の進め方は...						
1 聞きやすい話し方だった	6,367	3.71	1.13	7,137	3.70	1.13
2 各回の授業内容の量が適切だった	6,367	3.80	0.99	7,130	3.76	0.97 *
3 各回の授業のねらいは明確だった	6,366	3.76	1.03	7,129	3.73	0.99
4 各回の授業内容は明確だった	6,354	3.76	1.04	7,108	3.73	1.00
5 十分な静粛性が保たれた	6,360	3.73	1.17	7,117	3.67	1.20 **
6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,359	3.61	1.10	7,117	3.56	1.09 *
7 板書のしかたが適切だった	6,333	3.07	1.13	7,101	3.00	1.11 **
8 映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	6,325	3.35	1.26	7,078	3.25	1.32 **
9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,352	4.00	0.92	7,111	3.98	0.90
この授業の内容は...						
1 新しい考え方・発想に触れた	6,367	3.77	1.00	7,126	3.72	0.99 **
2 基本的知識が得られた	6,368	3.81	0.98	7,127	3.80	0.93
3 テーマが現代的な意味を持っていた	6,364	3.97	0.98	7,130	3.99	0.93
4 最新の学問成果に触れた	6,360	3.43	1.00	7,119	3.40	0.96
総合的にみて、この授業は...						
1 わかりやすい授業だった	6,365	3.62	1.15	7,128	3.60	1.12
2 授業全体の目標が明確だった	6,364	3.72	1.03	7,125	3.65	1.00 **
3 学問的興味をかきたてられた	6,365	3.49	1.13	7,125	3.42	1.13 **
4 この授業を受けて満足した	6,365	3.59	1.14	7,124	3.54	1.12 **

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 5 法学部

1. 集計データからみられる結果のまとめ

学部間比較では、法学部の出席率の低さのほか、授業への積極的参加、授業の準備、発展的学習においても相対的に下位にあることが目に付く。ただし、予習復習時間が最も多いのは理学部、次いで法学部であることから、学問的ディシプリンと学習方法の違いが学生の自己努力認識にも反映していることがうかがわれる。もし問題があるとしたら、授業が必要としている自己学習と、実際に行われている自己学習の水準のギャップであろう。

授業内容のねらい、明確さ、わかりやすさについての評価も学部間でみると相対的に低い。これも理学部と共通している。しかし学生は何をもって「明確」と考えているのか、直には把握しにくい。情報や議論を与えられたい、板書、視覚教材等についても、評価は高くないが、これは法学の伝える学問的内容と、大教室の使い勝手（の悪さ）の両方が影響していると考えられる。教員の所見を見ると、教材や話し方について、対応と改善を意識して気にしている教員が多い。静肅性（私語）については、不満は特に多いということはない。

教室規模との連関では、2004年度は100～150人規模の授業の評価が高いことが判明した。2005年度は、授業運営に関する個別項目（ 、 、 ）の多くで50人以下の小規模授業の評価が高い一方、100～150人規模の授業の評価もやはり高く、特に全体的評価（ ）で上位にある。理由は規模によるか、個々の授業科目によるのか、依然はっきりしない。

学年間の違いでは、授業運営から全体的評価にいたるまで、1、2、3、4の学年が上がる毎に平均が高くなることは明確である。これは、単に（そんなものだという）慣れに帰すことはできないのではないか。学年を追う毎に学生の法学・政治学の学習スキルや自分なりの関心が高まっているという積極的捉え方もできるであろう。しかし逆に、初学年や必修型科目について、不満が感じられていることについて、個々の教員というよりはカリキュラムとして、取り組む余地があるのかもしれない。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

目立って多いのは、学生が予習復習等に時間を割いていないことを残念とする所見である。予習復習をしていないにもかかわらず「授業に積極的に参加した」と自己評価している数の多い（自分に甘い）傾向は、注意を要するとの指摘もあった。

シラバスについては、締め切りが授業評価アンケートの結果より早いので、次年度にフィードバックすることに無理がある、という点について何人かの指摘があった。

視覚教材の使用や、板書については、あまり使用していなかったのが必要を感じるという反応の一方で、多用しないことには理由があるというポリシーが記されている科目も複数ある。「何でもやる方がよい」というよりは、自覚的、選択的に授業方法が考えられていることがうかがえた。アンケート項目が教材関係に多く偏っていることなどについて、教員からの意見をフィードバックして項目を修正してほしいとの教授会口頭意見もあった。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

自由記述欄では、個々の学生の要望やそのバラツキがうかがえる。複数の教員から、授業のペース（早すぎる／わかりやすい、話が飛ぶ）について、学生の評価が大きく分かれたり、実際には話が多面的に組み立てられているのを理解されていない、との感想が寄せられたりしている。近年しばしば話題に上る学生の傾向と一致しているといえるが、それについて教員の所見では、学生の出席率や成績との相関が気になるという意見、質問をつねに促しているのに来ないで批判的評価をするのを問題と感じるという意見、塾のように「ポイント」を繰り返すのが「メリハリのある」授業だと勘違いしているとの意見等があった。

またレジュメ、資料について、配布を多く、内容を詳しく、早めにウェブでアップしてほしいという学生の要望があることが認識されている。ITに長けた教員はそれに応じようとしている事がうかがわれる。また、視覚教材等をあまり使わない教員については、使ってみようという応答がみられる。教員間のITリテラシーの差異がどれくらいあるか、については、不明である。その一方で、情報をすべて聞き・写し取るのではなく、自分自身で選択してノートを取り、図式化する能力を身につけてほしいという学生への切実な要望も見受けられる。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

比較的簡素な記載が多いが、データや特に自由記述欄のコメントを参考に、改善の提案を行っている教員が多数であった。他方（教授会での口頭意見であるが）、上二つの所見に加えて「改善」の記述を求められても内容が重複し、苦痛であるとの指摘があった。

3 . 「学生による授業評価アンケート」についての意見

評価をした学生達への謝辞を述べる教員が少なくなく、それらは単にリップサービスにとどまるものではないようであり、アンケートが教員にとっても授業改善に資する意味があり、また（高い評価は）励ましとなると感じられている様子がうかがわれる。

他方、法学部の場合（大教室を中心に）、聞きづらさへのクレームが寄せられることがあるが、それが「教員の話し方」として受けとめられている場合もあれば（深刻に悩まれている場合もある）、話し方の問題を越えると認識されている場合（同じ科目なのに昨年度と教室が変わり、評価も異なった）もある。これは、授業評価アンケートにおいて、施設の改善要望と、教員への要望が混同されうる問題を示している。

また、人格否定的、八つ当たり的な自由記述欄のコメント（2006年のある科目では「つまらない・・・死んで良い」、「暑い・・・金払っているのだから・・・死ね」といった例があげられている）に、教員の側がショックを受け、傷ついていることは決して看過すべきではない（処分を求める意見もある）。

教員の側からの誠実、切実な反応については、今後のアンケートの実施において、また学生とのコミュニケーションにおいて、反映されることがやはり望ましいのではないかと。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較（法学部）

項 目	2005			2004		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	6,965	4.36	0.93	7,207	4.31	1.01 **
2 この授業に積極的に参加した	6,963	3.49	1.09	7,211	3.45	1.15 *
3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,957	2.62	1.03	7,201	2.55	1.02 **
4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,949	2.74	1.11	7,201	2.66	1.11 **
5 シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	6,931	3.08	1.07	7,185	3.04	1.08
6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間）	6,952	1.75	0.93	7,197	1.75	0.91
この授業の進め方は...						
1 聞きやすい話し方だった	6,958	3.62	1.20	7,205	3.57	1.25 *
2 各回の授業内容の量が適切だった	6,952	3.60	1.06	7,202	3.54	1.12 **
3 各回の授業のねらいは明確だった	6,951	3.66	1.03	7,190	3.57	1.11 **
4 各回の授業内容は明確だった	6,944	3.67	1.05	7,184	3.60	1.14 **
5 十分な静粛性が保たれた	6,937	3.76	1.16	7,179	3.80	1.15
6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,935	3.53	1.15	7,178	3.47	1.17 **
7 板書のしかたが適切だった	6,913	2.96	1.15	7,079	2.86	1.13 **
8 映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	6,831	2.97	1.24	7,070	2.92	1.24 *
9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,924	3.92	0.96	7,178	3.85	1.02 **
この授業の内容は...						
1 新しい考え方・発想に触れた	6,945	3.73	1.02	7,193	3.61	1.06 **
2 基本的知識が得られた	6,941	3.82	0.97	7,194	3.75	1.03 **
3 テーマが現代的な意味を持っていた	6,940	3.85	1.00	7,188	3.79	1.04 **
4 最新の学問成果に触れた	6,931	3.45	1.03	7,185	3.34	1.05 **
総合的にみて、この授業は...						
1 わかりやすい授業だった	6,938	3.55	1.15	7,193	3.46	1.26 **
2 授業全体の目標が明確だった	6,944	3.62	1.04	7,190	3.54	1.11 **
3 学問的興味をかきたてられた	6,943	3.47	1.12	7,191	3.38	1.18 **
4 この授業を受けて満足した	6,943	3.54	1.14	7,190	3.44	1.23 **

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 6 観光学部

1. 集計データからみられる結果のまとめ

観光学部の「学生による授業評価アンケート」(以下「学評」)結果は、文系学部の中で突出した特徴を持つ結果とは言えない。

昨年と同様、文系学部が全体に 3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」ならびに 6「授業の予習復習等に毎週当てた時間」において、評価平均は低位にある。にも関わらず、授業評価の 1「わかりやすさ」ならびに 4「満足度」が比較的高位の値を示している。このことは、学生が十分な準備をせずに講義に参加しても満足できる内容と水準に授業内容が留まっていることを示唆している。

この結果との関連でみれば、2「基本的な知識」 3「テーマの現代的意味」は伝授されているにも関わらず、4「最新の学問成果」の伝授についての評価はそれらよりも低い値に留まっていることに留意すべきである。

強引に述べるならば、観光学部の教育では、現状より「学問研究」側に教育内容を移しつつ、徐々に教育内容を高度化する方向を検討してもよいと考えられる。

授業の進め方では、特に大きな問題は無い。やや問題は 7「板書の方法」であるが、多くの講義がパワーポイントなどのA V型提示装置を使っていることから、項目そのものの適切性に疑問がある。

学部の質問項目について、4「旅行好き」は平均値が最も高くSD値も小さいことから、学生の属性を良く示していると考えられる。しかし、そのような学生に6「授業を通じて観光関連の仕事に興味をおぼえ」させているかという値は高くなく、昨年同様、これも同時に観光学部の学生の属性を示している。つまり、観光の基礎を学んでも観光経営を将来の職業として考える学生が多数派ではないことが示唆されている。上記との関連で考えれば、

1「新しい考え方・発想」ならびに 4「最新の学問成果」を伝授するためには、従来型の観光産業やそこでの職業に連動させるだけでなく、教員が授業内容を通じて観光の社会における幅広い役割を伝える努力が必要であることが示唆される。

学生の受講態度について 2「受講中の飲食や私語」は、否定的な意見の学生が多いことが示された。これは、実態とは異なる傾向である。ただし、これが設備、規模、学年を特定するクロス集計を得て、状況を特定することができていないので、2006年度以降の改善へ直接結びつくことは無い。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

教員は、自身の講義に関する「学評」のみを見せられ、所見を述べているので、全体としての傾向があるわけではなく、これをまとめることは、上記の1とは異なり、意味のあることではない。

教員からの所見の動向を示せば、多くの教員が自身の講義に対する学生の評価が、適切かつ好意的であったと受け取っている点があげられる。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

このまとめも 2 - 1 と同様である。

自由記述に対する教員の所見は、授業改善へのヒントを得ていると考えられるものと、自身の教育理念との葛藤に苦しむものとの二分されるようだ。後者は、多くの場合 2 - 1 との関連で、少数意見に敏感に反応している傾向がある。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

このまとめも 2 - 1 と同様である。

講義ごとの条件で、配布する補助教材、視聴覚教材、フィールドワークなどの教授法の改善が提示されている。また、問題として示された 7「板書の方法」の問題は、そもそも板書を必要としない教員には意味を持たない問題で、とまどいを持つかもしれない。

3 . 学生からの意見（自由記述）の集約

3 -1 「肯定的評価として多い意見の集約」

補助教材の使い方、新しいトピックによる注意の喚起、講義内容の反復などが好意的に受け取られている。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

具体的な授業方法について、カスタマイゼーションを要求する意見が多いと言える。また一部に、講義中の教員の表現方法への意見もあった。これは、各教員が十分に注意すべき点である。

4 . 今後の授業改善に向けた課題

1) 2004 年度との比較

全学ではほぼ全ての項目で 2005 年度評価は 2004 年度評価よりやや高い値を示している反面で、観光学部では、教育の方向（ の項目）を中心にやや値が低くなった。そのために授業に対する満足も気持ち低下している。

2) 授業に参加させる準備をさせる

教員は授業の準備をして講義に臨んでいると評価されながら、その講義の内容はわかりやすく、目標が明確だったとの評価は、これを下回っており、観光学の学問内容に触れたとの評価も同様に低い。

項目ごとの評価は、全体に低くはないが、このような傾向を見せているということは、「満足の向上」のために教育内容のメリハリが多少落ちている可能性を探ってみる必要があるのではないだろうか。この点は、 7「この授業を学ぶことにより興味がわいた」への評価が同様に他の項目に比べて相対的に低位にとどまっていることから示唆されている。

2006 年度に新学科を設置する予定であるので、今後の評価の推移に注目しておく必要

がある。

3) その他

2「受講中の飲食や私語」の問題は、学生がそれは「いけない」と感じているにも関わらず、実態として幅広く存在しており、理念と行動の間に矛盾があることを示唆する結果となったが、今後検討の余地が残されている。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較（観光学部）

項目	2005			2004			
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
この授業へのあなたの取り組み方について...							
1	授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3,755	4.39	0.89	3,119	4.29	0.96 **
2	この授業に積極的に参加した	3,748	3.59	1.08	3,118	3.67	1.09 **
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,749	2.69	1.06	3,115	2.73	1.04
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,752	2.78	1.15	3,112	2.81	1.10
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立つ	3,738	3.24	1.08	3,098	3.27	1.05
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間）	3,750	1.54	0.87	3,111	1.51	0.79
この授業の進め方は...							
1	聞きやすい話し方だった	3,753	3.57	1.19	3,120	3.69	1.13 **
2	各回の授業内容の量が適切だった	3,749	3.83	0.96	3,118	3.82	0.94
3	各回の授業のねらいは明確だった	3,751	3.75	1.07	3,115	3.82	1.00 **
4	各回の授業内容は明確だった	3,742	3.75	1.07	3,114	3.83	1.00 **
5	十分な静粛性が保たれた	3,748	3.58	1.13	3,113	3.64	1.13 *
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,742	3.69	1.04	3,104	3.70	1.05
7	板書のしかたが適切だった	3,725	3.07	1.11	3,086	3.16	1.11 **
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3,715	3.45	1.26	3,088	3.51	1.28
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3,739	4.03	0.91	3,110	4.09	0.90 *
この授業の内容は...							
1	新しい考え方・発想に触れた	3,752	3.79	1.03	3,116	3.77	0.99
2	基本的知識が得られた	3,752	3.84	0.99	3,117	3.88	0.95
3	テーマが現代的な意味を持っていた	3,749	3.89	0.99	3,114	3.92	0.96
4	最新の学問成果に触れた	3,747	3.45	1.04	3,111	3.43	1.00
総合的にみて、この授業は...							
1	わかりやすい授業だった	3,751	3.59	1.17	3,116	3.70	1.09 **
2	授業全体の目標が明確だった	3,751	3.66	1.08	3,117	3.75	1.01 **
3	学問的興味をかきたてられた	3,751	3.49	1.18	3,116	3.54	1.09
4	この授業を受けて満足した	3,751	3.60	1.16	3,116	3.67	1.09 **
学部等による設問							
1	わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ（観光学部以外の学生は答えないこと）	3,112	2.81	1.04	2,919	2.94	1.03 **
2	わたしは、授業中に、飲食や私語することを好ましくないと思う	3,159	3.92	0.96	2,948	3.88	0.98
3	わたしは、武蔵野新座キャンパスで学ぶことに満足している	3,160	3.60	1.24	2,948	3.64	1.22
4	わたしは、旅行することが好きだ	3,157	4.50	0.80	2,946	4.52	0.81
5	わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	3,155	3.37	1.22	2,944	3.35	1.17
6	わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	3,153	3.16	1.25	2,941	3.18	1.22
7	わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	3,141	3.28	1.26	2,940	3.30	1.21

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 7 コミュニティ福祉学部

1. 集計データから見られる結果のまとめ

学年の度数に関して4年生が少ない(10.10%)という結果は、昨年と同様であった。これは、コミ福の学生の多くが、3年次までに卒業に必要な単位の大半を取得していること、就活、卒業研究など、4年次を有効に使っている結果と思われる。

学外者が少ない(0.79%)という結果については、キャンパスの立地条件を考慮に入れても確かに低いように思われる。この結果は、昨年と変わっておらず、Fキャンパスなどで、コミ福の授業をさらに宣伝していく必要があると考えられる。

「授業への取り組みの姿勢」としては、昨年と同様、出席率はよく(4.42)、授業にも積極的に参加している(3.67)一方、予習復習に当てる時間が少なく(1.54)、授業への準備も十分とはいえない(2.78)傾向が顕著に見て取れる。前者はコミ福の学生の真面目さと熱意を象徴する数字と見ることができ、後者に関しては、学生の消極性・受け身な態度を示唆する警告として受け止めることも必要であろう。また、学生の授業への取り組みに関する教員からの積極的な働きかけが今後とも必要と考えられる。

「授業の進め方」に関しては、十分な静肅性が保たれたという項目が3.65という平均値を示し、立教全体のなかでも、平均的なグループに位置づけられる。しかし、昨年の評価(3.75)と比較すると、有意に低下している。この変化が何に起因しているのかについては、さらに詳細な検討が必要であろう。一方、教員は授業の準備を周到に行っていたという項目(4.06)が昨年と同様に高得点を示し、授業のねらい・内容の明確さ、話し方、教材の使い方ともおおむね肯定的な評価(3.74~3.86)を維持している。なかでも、視聴覚教材の効果的な使用(3.69)については、昨年の評価(3.46)より有意に上昇しており、教員側の工夫がうかがえるといえよう。

新しい考え方・発想に触れた(3.99)、基本的知識が得られた(3.97)、テーマが現代的な意味を持っていた(4.14)といった「授業内容」に関する項目は、昨年同様、高い評価を維持している点は、まず満足すべき状況と言えよう。一方、最新の学問成果に触れたという項目については、昨年より上昇したとはいえ、3.69という数値に留まっていた。常に最新の学問成果を提供すべきであるという問題ではないが、いわゆる授業のマンネリ化傾向を示唆する数値でないか、検討を要するところである。

総合的にみた授業に関する満足度(3.75)に関しては、昨年(3.63)より有意に増加しており、おおむね納得のゆく数値である。ただし、学問的興味をかきたてられたという項目(3.68)が、昨年同様、他の項目と比べて相対的に低い数値を示している。このことは、教員の側からの働きかけがさらに必要であることを示している一方で、「学問」という言葉に対する学生たちの謙虚さの表れであるとみなすこともできるかもしれない。

コミ福の授業に対する評価は、いずれの項目においても、立教全体のなかで相対的に高いグループに位置づけられていた。とりわけ、「 . 授業内容」および「 . 総合評価」項目に対する評価得点は、最も高いグループに位置づけられていた。この結果は、 コミ福が実学中心の学部であること、 学生の授業に対するニーズや期待に、教員側も意識的に応えようとしていることの表れとみなすのは無理があるだろうか。

2 . 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 授業評価に対する担当教員の所見

全般的な意見

- ・ ほぼ妥当で、自分としても納得し満足のできる数値である。
- ・ 学生はおおむね、真面目に、積極的に授業を理解しようとしており、感謝している。
- ・ 一方、基礎知識を踏まえ、発展的な勉強を進めるための動機付けに今一つ欠けていたのは残念である。
- ・ 基本的な知識や社会的・現実的な問題を伝えることはできたが、アカデミックな内容ではなかった点で改善の余地がある。
- ・ 実習による欠席した学生への手当をどのように行うのが課題。

少数意見

- ・ 授業内容が4年生に焦点をあわせすぎたため、「わかりやすさ」の点で評価が分かれてしまった。
- ・ 毎回ミニテストを実施し、対話方式も取り入れたことが、高い評価につながったと思われる。
- ・ 重要論文を教科書として提示したことが、昨年と比べて予習・復習の時間の増加につながった。
- ・ 学生はとかく明確な数量的結論を求める傾向が強く、提示された複雑な事象について、自らの頭で思考することを怠っている傾向がある。
- ・ 少人数の効果には歴然たるものがある。
- ・ 大教室での授業では、実習などによる欠席者が多い場合、学生が後ろに固まる傾向があった。積極的に参加できる策を考えるべきであった。
- ・ 課題（宿題）を出すことによって、事前準備をして講義に臨む学生が増えたが、逆に準備できない学生は出席しなくなった。

2 - 2 自由記述欄に対する担当教員の所見

全般的な意見

- ・ 自由記述欄に記入するのは、そもそもが真面目で熱心な学生であると思われ、それだけに全般的に好意的な記述が多いのも当然であるが、それでも励まされる。
- ・ 私語の多さ、板書の読みにくさなどの指摘に対しては、率直に改善の余地があると思わされる。
- ・ 全体的にスライドなどの視覚教材は評価が高い。

少数意見

- ・ レジユメがすべてパワーポイントと同じで、ポイントがはっきりしないという指摘があった。
- ・ 少数ながら、「毎回のディスカッションは、負担だった」との意見があった。
- ・ とにかく生の声を学生に届けようということで多くのゲストを招いた。それが非常に成功したと思う。
- ・ 毎回リアクションペーパーを書かせ、次回の授業の冒頭で、前回のリアクションペーパーを数枚ずつ紹介するという授業の開始の仕方が評価されたと思われる。
- ・ 新聞記事を資料として配付したことが一定の評価を得られたようである。
- ・ 学生は現場の話になると、真剣に聞いている。現場の話を聴きたがっている。
- ・ 「専門用語の説明が少し不足していた」という指摘があり、注意が必要な反省材料として受け止めたい。
- ・ 比較的少人数なのに大きな教室であったため、散漫になってしまったきらいがある。

2 - 3 改善に向けた今後の方針

全般的な意見

- ・ 教材・板書の工夫と改善が必要。
- ・ 授業内容をさらに分かりやすいものにする工夫が必要。
- ・ 大教室大人数での授業でも静肅性が保たれるよう、これまで以上に注意する。
- ・ 発展的な勉強への意欲を高めるよう努めたい。
- ・ 学生相互の討議を活発化させたい。
- ・ 参考図書や文献の紹介と提示をていねいに行うこと。

少数意見

- ・ 次回の授業のテーマ、検討したい課題を一層明確に提示し、予めテーマについて考えてきてもらう工夫を行いたい。
- ・ 講義中の学生とのコミュニケーション（対話）について考えていきたい。
- ・ 学問的枠組みを明確に提示しながら授業を展開する。
- ・ パワーポイントの活用などは、学生の意見も聞きながらもう少し緩やかに進めたい。
- ・ 視聴覚教材（パワーポイントなど）の使用に、過大な効果を期待するのは誤りだと思う。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較（コミュニティ福祉学部）

項 目	2005			2004		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	3,967	4.42	0.82	3,684	4.36	0.85 **
2 この授業に積極的に参加した	3,967	3.67	1.00	3,690	3.63	1.02
3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,961	2.78	1.01	3,680	2.68	0.98 **
4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,958	2.97	1.09	3,681	2.88	1.06 **
5 シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3,942	3.25	1.05	3,672	3.26	1.03
6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間）	3,958	1.54	0.84	3,682	1.52	0.78
この授業の進め方は...						
1 聞きやすい話し方だった	3,965	3.76	1.06	3,691	3.66	1.09 **
2 各回の授業内容の量が適切だった	3,964	3.80	0.95	3,688	3.74	0.95 **
3 各回の授業のねらいは明確だった	3,961	3.86	0.95	3,686	3.74	1.00 **
4 各回の授業内容は明確だった	3,956	3.86	0.95	3,681	3.77	1.00 **
5 十分な静肅性が保たれた	3,960	3.65	1.13	3,680	3.75	1.11 **
6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,958	3.74	1.01	3,681	3.66	1.03 **
7 板書のしかたが適切だった	3,938	3.04	1.04	3,674	2.98	0.97 *
8 映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3,947	3.69	1.11	3,672	3.46	1.16 **
9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,947	4.06	0.91	3,670	4.02	0.88
この授業の内容は...						
1 新しい考え方・発想に触れた	3,965	3.99	0.91	3,688	3.91	0.96 **
2 基本的知識が得られた	3,964	3.97	0.88	3,687	3.90	0.88 **
3 テーマが現代的な意味を持っていた	3,960	4.14	0.86	3,685	4.13	0.87
4 最新の学問成果に触れた	3,953	3.69	0.94	3,673	3.56	0.95 **
総合的にみて、この授業は...						
1 わかりやすい授業だった	3,962	3.74	1.06	3,683	3.64	1.07 **
2 授業全体の目標が明確だった	3,961	3.80	0.97	3,682	3.69	1.00 **
3 学問的興味をかきたてられた	3,960	3.68	1.08	3,681	3.57	1.08 **
4 この授業を受けて満足した	3,963	3.75	1.06	3,683	3.63	1.08 **

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 8 全学共通カリキュラム

1. 集計データからみられる結果のまとめ

全学共通カリキュラム（以下全カリ）における授業評価アンケートの回答者数は16,104名、回収率は45.83%であり、ほぼ昨年と同様の値（16,963名、44.94%）であり、全学平均値をわずかに上回るものであった。

全カリにおける、各項目平均値の2004年度との比較の結果では、すべての項目で統計的に上昇しており、全体的な学生の評価が上昇していることが示唆されている。特に、昨年度、改善すべき課題として挙げられていた「静肅性」に関する評価が、もっとも上昇しており（3.34→3.50）、授業改善に向けた各教員の取り組みが評価されていた。

学部間の比較では、全カリの学年分布が、全学の学年分布と傾向が大きく異なることを最初に述べておきたい（1:2:3:4学年、全カリ vs 全学、51.44% : 29.17% : 12.38% : 7.01% vs 29.70% : 31.37% : 25.73% : 10.10%）。特に、1学年の比率が50%を超えており、全カリの回答には1学年学生の評価が強く反映しているものと考えられる。以上のことをふまえて、各項目に関して、全カリと他学部との比較を試みる。授業への取り組みに関しては、出席率とシラバスの有効性に対して評価が高かった。しかし、昨年と同様に、履修にあたっての準備、発展的な勉強の有無、予習復習への時間に対して、他学部の評価より低い傾向であった。このことは、全カリが学部専門科目と異なり、自分の専門外の授業を履修する機会が多いためであることや、演習系の授業をアンケート実施科目から除外していることが影響していると思われるが、学生に対して「教養を高める」という観点から学習する姿勢を促す必要性を感じる。授業の進め方に関しては、話し方、各回の量、ねらい・内容の明確さ、映像視覚教材の効果に対して、高い評価であったが、昨年度よりはポイントが上昇しているものの、他学部と比較して静肅性が保たれていない傾向にあった。このことは、授業における履修規模別の結果からも明らかなように、履修人数に大きく作用されることであり、今後も学生の履修環境の改善に努めていきたい。また、全カリにおける「151～」のクラスの割合が14.65%あり、全学の割合（7.33%）よりも多いことも影響していると思われたが、大学教育開発・支援センターの報告にもあるように、全学と比較して、大規模授業の評価が高いことが全カリの特徴であることから、その影響は小さいと考えられる。総合評価では、昨年度はいずれの項目も中位であり特徴が見出せなかったが、本年度は、授業のわかりやすさ、目標の明確さにおいて、上位に評価されていた。

履修グループ間の比較に関しては、下記5、研究室ごとの総評に記述する。

学年間の比較では、他学部よりも1年生が授業への積極的な参加する傾向は本年も変わらなかったが、全学の傾向も同じ傾向になったため、全カリ特有の傾向ではなくなった。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

対象科目が膨大なため、下記5、各研究室の総評に記述する。

3. 学生からの意見（自由記述）の集約

2004年度と同様に、「難しいテーマがわかりやすかった」「興味を持てた」「全カリでしか扱えないテーマでよかった」といった、専門学部では開講されていない科目開講への好意的

な意見と、相反して、「内容が多すぎた」「専門的すぎた」「内容が浅すぎた」といった、全学部の学生を対象故の問題点を指摘する意見もあった。また、授業運営に対する指摘も賛否両論であることから、全カリ全体として集約して述べることは非常に困難である。しかし、本アンケート結果が、各担当者の授業改善への方向性を考える上で、大変貴重な資料になっていることは疑いがない。

4．今後の授業改善に向けた課題の提示

全カリ総合科目では、2006年度から、web登録対象科目の増加や履修上限単位数の減少を実施しているが、このことが、授業環境の改善に貢献しているのかは、次年度のアンケート結果から慎重に分析する必要があると考える。その際、授業そのものではなく、全カリ全体に対する学生の評価（たとえば、web登録科目に落選した学生の意見など）を反映できるような調査方法を、今後検討する必要があると考える。

また、所見票の今後の方針に、記述していたキーワードとして、「議論」「双方向」「自主性」といった、学生の主体的な取り組みを引き出す工夫を記述する教員が多く見受けられた。全カリのような、全学部全学年を対象とした教養教育科目における、このような取り組み方も今後の課題であると考えられる。

5．各教育研究室からの総評

5 - 1 人文学教育研究室

「思想・文化」および「芸術・文学」について、若干のコメントを記したい。前年度と同様、「（総合評価）」においては、特に指摘すべき点はないようである。

肯定的な結果と思われるものは、「思想・文化」では、「話し方の聞きやすさ」、「静粛性」、「新しい考え方・発想」の3項目で得られた。これらのうち、前年度に比して新たに加わったのは「静粛性」である。「新しい考え方・発想」の評価点はすべての総合A群科目カテゴリ中で最高値を示しており、おそらく学生の高い関心が、「静粛性」という望ましい雰囲気を教室内に醸成したものであると思われる。この結果は、担当者には励みとなるのではないだろうか。

「芸術・文学」では、「聞きやすさ」および「静粛性」が、「思想・文化」と肩を並べて、「数理」に次ぐ高い評価を得た。さらに、「発展的な勉強の誘発度」は、すべての総合A群科目カテゴリ中で最高値を示した。これも昨年の評価を上回る結果であり、担当者の励みとなると思われる。

否定的な結果と思われるものは、「思想・文化」では、「授業内容の明確さ」、「教員の準備」、「板書の仕方」の3項目で見られた。特に「板書」は最下位であり、これは教員の自覚によって容易に改めうるものであるので反省材料とすべきであろう。

「芸術・文学」では、「授業内容の明確さ」、「テーマの現代性」、「最新の学問成果との接触」の評価が辛かった。特に後の二つは最下位にあるが、しかしこれはこのカテゴリで扱う作品群が、古典寄りであることにも負っているのではないだろうか。

二つのカテゴリで珍しく評価が分かれたのは、「教科書・プリント・参考文献の効果」という項目である。「思想・文化」は低く、「芸術・文学」は高かった。これは「文学」と

いうジャンルでは、プリント等を準備しやすいからかとも推測されるが、少し実情を調べてみる必要がある。

5 - 2 社会科学教育研究室

社会科学教育研究室が主として運営する『歴史・社会』について、他の科目群よりも比較的高い点数であった項目は、昨年と同様に「テーマが現代的な意味を持っていた」であった。これに対して、今年度から設けた「教室の大きさは適切だった」および「受講者数は適切だった」という項目に対しては、際立って得点が低く、以前から言われて来た大人数講義の問題が、特に歴史・社会の科目についてはっきりと表れた形になった。この点は所見についても見られ、改善に向けた今後の方針について指摘されることが多かった。特に、現在の目安となっている300名に満たないレベルの講義規模でも、受講者とのやりとりや、静粛性の確保が難しいという指摘もあるため、単純な講義人数の規模にとらわれずに、適切な人数に対する適切な教室の配置や、TAの充実など、全般的な形で講義運営の支援が行なわれることが望まれる。また一方で、規模に関わりなく私語の問題についての指摘も多く、この点は学生自身への受講態度の改善を訴える手段が必要であろう。加えて、相変わらず板書への意見ばかりが目立つことにも関連するが、匿名によるアンケート自体の意義として、学生自身がどの程度しっかりした基準を持って講義を選択し、それを評価しているのかについても、疑問を呈する意見も見られた。

5 - 3 自然科学教育研究室

自然科学教育研究室が運営している『生命・物質・宇宙』『数理』また運営に参加している『環境・人間』の授業評価アンケートの点数は全般的に高い。特にアンケート項目の「VI 総合的に見て」の項目ではそのほとんどで、『生命・物質・宇宙』『数理』『環境・人間』が上位の3つを占めていることは十分に評価されるべきことである。「3 授業内容のねらいの明確性」「9 教員の授業準備の周到さ」などの項目が同時に高いことから読み取れるように、評価が高いことの第一の理由は、「教員が授業内容について真剣に考え」「十分に準備を行っている」からである。

一方、理系の科目の内容を正確に理解するためには「記号」「数式」の利用は本質的には避けて通ることができず、またそれらの習得には若干の反復訓練が必須である。しかし、現在の学生は高校以来ほとんど理科数学の学習に触れておらず、基本的知識の程度が年々低下していることは現場の教員が肌で切実に感じている事である。全力の履修は「選択」が原則であるために、そのような訓練をすると学生自身が負担を感じ、履修をやめてしまう。どのようにして学生に科目内容を伝えるかについては、全力で自然科学を教える個々の教員が大きな負担を感じながら授業を行っているのが実情である。

このような事柄が、理系の教員が少ない本学ではなかなか理解されることはないことは残念である。全力における理系の科目の展開の少なさと同時に、総合大学としての立教大学に必要な理科教養教育とはどのようなものであるかについての議論が必要である。そのような中で今回の授業評価アンケートの結果であると理解している。

アンケート対象科目の内、3分の1以上の教員の所見欄に「学生の授業態度、私語、遅

刻」などの問題点に関する記述があった。(アンケート中の静肅性に関する項目 6 では、自然系の科目は中上位の属する。)近年の「学生の授業態度」の問題は、各々の教室現場で個々に対応できる範囲を超えており、既に授業運営そのものにも大きく影響してきている。残念ながら全学的な対応を考える時が来ていると感じざるを得ない。

5 - 4 情報科学教育研究室

今回のアンケート集計結果において、『情報』で数値が高かったのは、「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」、「映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイント)が効果的だった」の2つである。また「教員は授業の準備を周到に行っていた」についても高い数値が得られた。これらの結果から考えられるのは、授業の内容を少しでも分かりやすく説明するために、担当者が十分時間をかけて資料を作成し、それを印刷・配布し、プロジェクトで表示しながら授業を行ったためではないだろうか。担当者の中にはパワーポイントのような文章や図だけではなく、ソフトウェアを実行したり、自分でプログラムを作成したりして授業で利用している例もあった。

また「テーマが現代的な意味を持っていた」、「および「最新の学問成果に触れた」についても高い数値が得られた。情報関係の内容は進歩が早く、最新の内容を取り入れた授業担当者の努力がこれらの結果に結びついたのではないかと考えられる。その他「わかりやすい授業だった」、「目標が明確であった」も数値としては前回より改善され、平均的な数値になった。

問題点としては、「学問的興味をかきたてられた」、「および「この授業を受けて満足した」の項目では数値が低く、今後の改善が要求される。数値が低くなった理由として考えられるのは、情報科学本来の学問的内容はかなり数理的なものであり、授業の目標としては実用面が中心であり、このような低い結果になったのではないかと。さらに情報の授業では、一般教室の講義より各自がコンピュータ操作を通して行う学習の方が実際の理解が増し、満足度が高くなるのではないだろうか。一般教室の授業でこれらの数値を高くしていくのが、今後の課題である。

5 - 5 スポーツ人間科学教育研究室

スポーツ人間科学教育研究室は心身に関わるテーマの科目を展開している健康・スポーツ学分野と心理学分野から構成された教育研究室である。この教育研究室は総合Aの『環境・人間』のカテゴリーに入っているが、科目群を比較した評価をしてみると、総合的に見た満足度、学問的興味、授業全体の目的の明確さにおいて、他のカテゴリーよりも相対的に高い評価が得られた。このことについては大人数科目における問題を抱えつつも、各担当の先生方の創意工夫によって出てきた結果であろうと思われる。このことは全カリ全体の評価として2004年度と2005年度との間に統計的に有意な差でほとんどの項目の評価が改善されている事からもうかがえる。個別の所見入力票を分析すると、依然として大人数科目であることで起こる幾つかの問題が残っている。具体的には静肅性が保たれるかということ、板書がわかりづらいという指摘などである。静肅性については全カリ全体の課題であり、2004年度との比較で唯一改善が見られなかった点である。しかし、研究室と

してはweb登録により500~1,000人規模のクラスがなくなったことで、随分よくなったという所見が複数あったので、改善されている傾向が観うけられた。「心の科学」の科目については板書されている先生が多く、後ろから見えないなど不満の声が寄せられているようであるが、パワーポイントでの授業でも一方的になるなど様々な意見がある。視覚教材を重視することだけでなく、ノートテイクの重要性などあらゆる面からの検証が必要であろう。2006年度から科目名が大幅に変更される事もあり、今後も学生の声に耳を傾けながら、期待に答えるような授業を心がけていきたい。

2005 年度項目別平均値および 2004 年度との比較 (全学共通カリキュラム)

項目	2005			2004			
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
この授業へのあなたの取り組み方について...							
1	授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	16,047	4.48	0.81	16,932	4.42	0.88 **
2	この授業に積極的に参加した	16,052	3.61	1.10	16,928	3.53	1.12 **
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	16,032	2.65	1.07	16,913	2.53	1.05 **
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	16,020	2.69	1.15	16,890	2.57	1.12 **
5	シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	15,957	3.31	1.11	16,840	3.22	1.12 **
6	授業の予復習等に毎週当てた時間(5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	16,020	1.45	0.82	16,892	1.41	0.76 **
この授業の進め方は...							
1	聞きやすい話し方だった	16,047	3.80	1.11	16,926	3.70	1.14 **
2	各回の授業内容の量が適切だった	16,041	3.84	0.97	16,908	3.75	1.00 **
3	各回の授業のねらいは明確だった	16,026	3.81	1.01	16,896	3.70	1.03 **
4	各回の授業内容は明確だった	16,011	3.82	1.00	16,885	3.73	1.03 **
5	十分な静粛性が保たれた	16,002	3.50	1.23	16,882	3.34	1.29 **
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	15,994	3.58	1.10	16,850	3.43	1.15 **
7	板書のしかたが適切だった	15,944	3.10	1.12	16,804	2.97	1.12 **
8	映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	15,931	3.58	1.25	16,768	3.49	1.28 **
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	16,000	4.05	0.91	16,850	3.99	0.93 **
この授業の内容は...							
1	新しい考え方・発想に触れた	16,021	3.89	1.00	16,903	3.78	1.02 **
2	基本的知識が得られた	16,023	3.83	0.97	16,896	3.75	0.99 **
3	テーマが現代的な意味を持っていた	16,015	3.89	1.04	16,882	3.83	1.07 **
4	最新の学問成果に触れた	15,985	3.40	1.04	16,862	3.33	1.06 **
総合的にみて、この授業は...							
1	わかりやすい授業だった	16,023	3.75	1.09	16,890	3.64	1.11 **
2	授業全体の目標が明確だった	16,011	3.75	1.02	16,890	3.63	1.03 **
3	学問的興味をかきたてられた	16,010	3.54	1.13	16,890	3.45	1.14 **
4	この授業を受けて満足した	16,011	3.66	1.12	16,889	3.55	1.14 **
学部等による設問							
1	この授業の教室の大きさは適切だった	14,707	4.05	1.08	2005年度に新設した設問のため、比較分析はなし		
2	この授業の受講者数は適切だった	14,601	3.79	1.13			

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

5 - 9 学校・社会教育講座

1. 集計データから見られる結果のまとめ

まず、講座の回答率は71.48%となり、昨年度の75.10%と比較すると、若干減少している。しかしながら他学部と比べて、本年度も、はるかに高い回答率である。ただしこれは講座としての性格上、当然ともされるかもしれない。

次に「学部間の違い：平均値の差の検定 総合評価」についてみると、質問項目1「わかりやすい授業だった」および2「授業全体の目標が明確だった」においてはトップ（共に3.86）を占めており、さらに4「この授業を受けて満足した」においても3.76とトップであり、さらにこの点は昨年度よりも上昇している。質問項目3の「学問的興味をかきたてられた」では3.56とトップを占めているわけではないが、昨年度よりも上昇している。ただし、トップを占めていない点については、講座設置科目の性格をも考慮する必要がある。

「学科間の違い：平均値の差の検定 総合評価」においては、質問項目3「授業全体の目標が明確であった」、質問項目4「学問的興味をかきたてられた」において、それぞれ社会主事課程・学芸員課程において、他課程との有意差が認められたようであるが、こおした評価の現れは、それぞれの課程の制度的な違いを考慮する必要がある。

「規模別の群間の比較：平均値の差の検定 総合評価」においては、全学的に指摘されているところであり、講座においても大規模授業の問題点が指摘されよう。「項目間の関連：相関係数」においても、講座として個別的な特徴は認められない。

次の「学年間の差：平均値の検定 総合評価」においては、講座は全学の傾向とやや異なる傾向にあるようである。すなわち全学的には学年が上がるに連れ、評価が高くなるとされているが、講座においては、学年による差が認められないとされている。講座においては、資格取得や職業につながるという目的志向をもつ学生が受講するわけであるが、学生のモチベーションが持続的であると解釈もされるが、同時にそうした学生のみが、講座履修を継続しているとする事も出来よう。

以上の集計データから、講座受講学生においては、授業への出席は良好であり、授業をきちんと受講し、基本的にそれなりの満足を得ているとされよう。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する教員の所見」のまとめ

授業評価に関する担当教員の所見を概観すると、学生からの評価を肯定的に受け止めている教員が多い。またその改善策を積極的に考えようとする記述がほとんどであった。特に調査項目6の結果についての関心が高く、その改善のためのコメントが多く見られた。ただし教員によっては、濃密な授業時間を重視し、小学校教育におけるような予習・復習を始めから求めているとする所見もある。

次に、昨年度の評価を受け、授業内容の厳選、あるいは視聴覚機器の使用を開始し、教育効果を高めようとする教員も見られるようになってきている。

ただし、「立教大学の授業評価全体像がよく分からないが、全ての科目が同じ質問内容だとしたら、科目により目的などがかなり違うので問題である」とするコメントもあった。具体的には、4に対し、「この授業の目的は、最新の学問、新しい考え方に触れるとい

う目的はほとんどなく・・・」と言った記述もあり、科目によって、不適當な評価項目と見なされるものもあり、今後検討すべき点かと思われる。ただし一方には「最新の学問的成果に触れたとは感じられなかったようだ・・・しかし、最新の学問的成果は折に触れ紹介したはずなので、そのたびごとにこれと注意を引くように話すべきであった」というコメントもあった。

2?2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

上記項目と同様、学生の記述に対し、教員からはそれらを積極的に受け止めようとする姿勢が見られる。ただし授業終了時のリアクションペーパーで、自由記述欄の内容に対しては授業時、出来る限り対応していたとする所見も認められる。自由記述欄の具体的内容については下記「今後の方針」項目で触れたい。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ほとんどの教員が学生の指摘を受け、その改善を目指している。それらは、また授業の活性化を計りたいとするコメントが多かった。ただ学生の求めるもの、また学生のレベルの多様性から、その改善については苦慮しているようである。

具体的には、講義内容としては、理解を促すための具体例の提示、あるいは実際の、教員の経験的事例の紹介を行うように努めたいとするものが見られた。

ただし多くは技術的問題であり、話し方の工夫、板書の改善（誤字脱字の減少・ナンバーリングの統一）、配付資料の改善、視聴覚機材の導入（パワーポイントの使用など）についての言及が多い。

3 . 学生からの意見（自由記述）の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価の多くは、「分かりやすい」、「関心が持てた」、「今後、考えていきたい課題となった」といった意見であり、全体としては、抽象的な表現が多い。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

多くは上記の反対の評価であり、話が「分かりにくい」、あるいは板書の「字が読みにくい」、「板書が取りにくい」といった、具体的内容である。ただし少数ではあるが、講義においては、概説書などに書かれていない内容を展開して欲しいというような記述もあった。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

こうした授業評価アンケートを行うことにより、教員による授業改善が一定程度なされることであろうし、なっていると考える。ただし毎年というよりも、インターバルを置きながら実施することで十分なのではなからうか。また兼任講師の先生の内には、こうしたアンケート調査自体に対する拒否反応を示すような記述もあり、今後続けるにしても、兼任講師には、何らかの対応・説明が必要であろう。またそれなりの別の調査項目の設定なども考えら

れよう。

今後の課題としては、授業における技術的問題、たとえば板書の仕方、あるいは板書と視聴覚機器との併用の仕方など、具体的な授業法についてのモデルケースを提示することも考えられよう。ただし教員においては、日常的に多くの雑務（たとえば多様な書類作成）、委員会出席などで、ますます教育・研究への時間配分が困難となっている現状である。従って、そうしたモデルケースの提示も、テキストの配布・ビデオの配布など、教員が自由に利用できる形が望まれよう。

2005年度項目別平均値および2004年度との比較（学校・社会教育講座）

項目	2005			2004			
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
この授業へのあなたの取り組み方について...							
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	2,717	4.62	0.63	2,481	4.61	0.65
2	この授業に積極的に参加した	2,718	3.82	1.00	2,482	3.75	1.00 *
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,715	2.91	1.04	2,478	2.87	0.99
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,716	2.96	1.13	2,475	2.88	1.08 *
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	2,703	3.24	1.07	2,458	3.19	1.04
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	2,712	1.64	0.89	2,473	1.58	0.82 *
この授業の進め方は...							
1	聞きやすい話し方だった	2,717	3.98	1.05	2,481	3.91	1.11 *
2	各回の授業内容の量が適切だった	2,719	3.91	0.96	2,480	3.89	0.97
3	各回の授業のねらいは明確だった	2,718	3.90	1.02	2,480	3.91	1.00
4	各回の授業内容は明確だった	2,715	3.92	1.01	2,476	3.91	1.01
5	十分な静粛性が保たれた	2,716	4.15	0.92	2,476	4.20	0.91 *
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,713	3.79	0.99	2,476	3.77	1.04
7	板書のしかたが適切だった	2,710	3.25	1.12	2,478	3.16	1.13 **
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	2,687	3.43	1.28	2,461	3.46	1.28
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	2,713	4.13	0.88	2,474	4.17	0.85
この授業の内容は...							
1	新しい考え方・発想に触れた	2,717	3.90	0.98	2,479	3.83	0.99 *
2	基本的知識が得られた	2,717	3.96	0.92	2,479	3.93	0.92
3	テーマが現代的な意味を持っていた	2,715	3.96	0.96	2,478	3.99	0.99
4	最新の学問成果に触れた	2,711	3.37	1.03	2,474	3.38	1.00
総合的にみて、この授業は...							
1	わかりやすい授業だった	2,716	3.86	1.09	2,479	3.85	1.09
2	授業全体の目標が明確だった	2,716	3.86	1.02	2,479	3.86	1.00
3	学問的興味をかきたてられた	2,716	3.56	1.11	2,480	3.47	1.13 **
4	この授業を受けて満足した	2,714	3.76	1.09	2,480	3.70	1.10 *

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

6 . 集計データについて (資料編)

以下のデータの読み取りに関する留意事項

- 1 . 本調査では、すべての科目ではなく、各教員1科目以上の実施がなされた(2 - 3 実施対象科目、2 - 4 実施教員数・実施科目数参照)。したがって、この集計データの解釈も、限定されたデータによるものであることを認識しておく必要がある。
- 2 . 調査実施において調査協力者の匿名性を守る必要性から、異なる科目に出席する同じ学生を一致させることができない。そこで、本分析において、度数および人数として表記されている数値は、述べ人数である。

6 - 1 学年および学内・学外者の度数

表1 学年の度数および%

学年	度数	%
1年	17,702	29.70
2年	18,699	31.37
3年	15,339	25.73
4年	6,018	10.10
不明	1,852	3.11
計	59,610	100.00

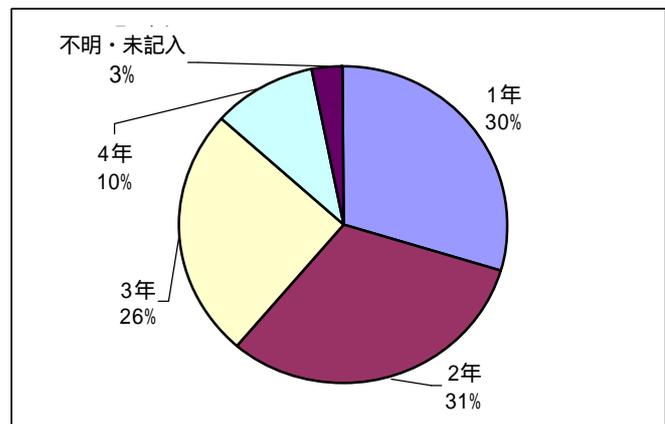


図1 学年の度数

表2 学内者・学外者の度数および%

	度数	%
学外	469	0.79
学内	59,141	99.21
計	59,610	100.00

6 - 2 項目内容と項目別平均値（全学）

表3 2005年度項目別平均値および2004年度との比較（全学）

項目	2005			2004		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	59,467	4.41	0.85	60,495	4.37	0.9 **
2 この授業に積極的に参加した	59,476	3.6	1.07	60,501	3.58	1.09 **
3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	59,407	2.72	1.06	60,449	2.65	1.04 **
4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	59,359	2.81	1.13	60,375	2.72	1.11 **
5 シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	59,152	3.22	1.08	60,190	3.18	1.08 **
6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	59,361	1.61	0.89	60,388	1.56	0.84 **
この授業の進め方は...						
1 聞きやすい話し方だった	59,460	3.7	1.15	60,498	3.68	1.16 **
2 各回の授業内容の量が適切だった	59,438	3.77	1.01	60,448	3.72	1.02 **
3 各回の授業のねらいは明確だった	59,403	3.76	1.03	60,404	3.71	1.04 **
4 各回の授業内容は明確だった	59,324	3.77	1.03	60,335	3.73	1.05 **
5 十分な静肅性が保たれた	59,327	3.68	1.18	60,342	3.68	1.2
6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	59,277	3.61	1.09	60,296	3.55	1.12 **
7 板書のしかたが適切だった	59,094	3.1	1.13	60,061	3.04	1.13 **
8 映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	58,824	3.39	1.26	59,776	3.29	1.29 **
9 教員は授業の準備を周到に行っていた	59,243	4.01	0.93	60,261	3.98	0.94 **
この授業の内容は...						
1 新しい考え方・発想に触れた	59,389	3.81	1.01	60,424	3.74	1.02 **
2 基本的知識が得られた	59,387	3.83	0.97	60,422	3.8	0.98 **
3 テーマが現代的な意味を持っていた	59,351	3.83	1.04	60,385	3.81	1.04 **
4 最新の学問成果に触れた	59,258	3.4	1.04	60,319	3.35	1.04 **
総合的にみて、この授業は...						
1 わかりやすい授業だった	59,370	3.65	1.13	60,409	3.61	1.15 **
2 授業全体の目標が明確だった	59,353	3.71	1.04	60,400	3.65	1.04 **
3 学問的興味をかきたてられた	59,353	3.51	1.13	60,395	3.45	1.14 **
4 この授業を受けて満足した	59,349	3.62	1.13	60,394	3.56	1.15 **

注) 最小値=1、最大値=5 SD=標準偏差

*の有意水準は、 $p<.05$ 、**の有意水準は、 $p<.01$ 。無印の場合、二つの科目の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

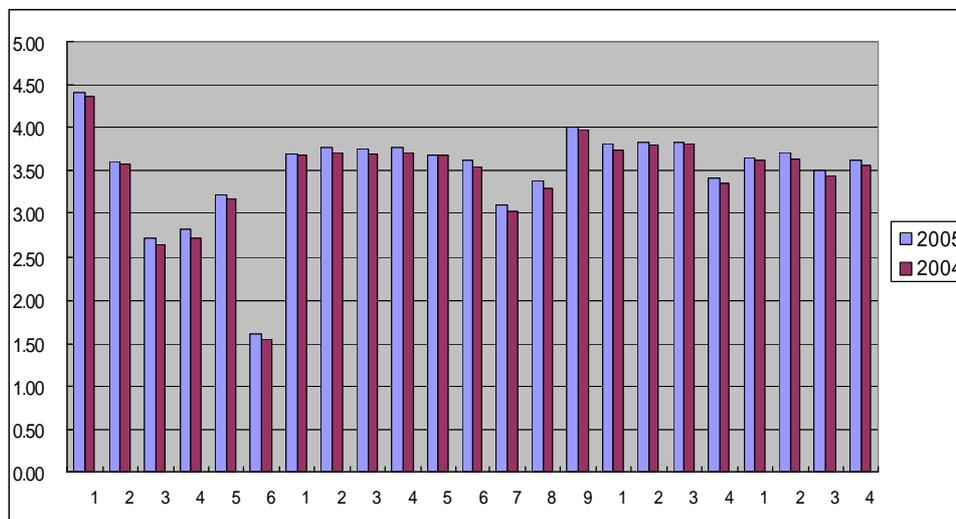


図2 各項目の平均値

6 - 3 回答者数と履修者数の比率

表4 学部別の回答者数と履修者数、および回答者数と履修者数の比率

	2005 年度			2004 年度		
	履修者数	回答者数	回答/履修(%)	履修者数	回答者数	回答/履修(%)
文	16,935	9,154	54.05	16,030	9,391	58.58
経済	22,958	7,653	33.33	22,663	7,269	32.07
理	5,950	2,882	48.44	5,981	3,311	55.36
社会	15,725	6,383	40.59	16,544	7,145	43.19
法	21,049	6,977	33.15	21,681	7,223	33.31
観光	7,961	3,761	47.24	7,169	3,122	43.55
コミ福	7,698	3,974	51.62	7,159	3,694	51.60
全力リ	35,256	16,104	45.68	37,744	16,963	44.94
講座	3,808	2,722	71.48	3,309	2,485	75.10
合計	137,340	59,610	43.40	138,280	60,603	44.34

注) 本分析における「回答者数」とは、アンケート実施科目に当日出席し、アンケートに回答した学生のことを示す。よって、この問題について検討する際、授業へは出席していたがアンケートには回答しなかった調査協力者も存在する可能性も、考慮すべきである。

6 - 4 「 . 総合評価」の平均値の学部間の比較

資料の読み方

(6 - 4 「 . 総合評価」の平均値の学部間の比較、6 - 5 「 . 総合評価」の授業規模による比較、6 - 7 「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較)

- ・ 各表の群 (学部・規模別群・学年) は、平均値の低いものから昇順に並ぶ。
- ・ 同じサブグループに平均値が示されている群どうしには、差がなく、異なるサブグループにある群どうしには、有意な差がある。
- ・ 差は相対的なものなので、群の並び順だけでなく、理論的な中央値 3.0 を超えているかどうかなどの数値の水準に関する検討も必要である。

【例 1】

1 わかりやすい授業だった

学年	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,567	3.45	3.59	3.70	3.92
2	20,328				
3	16,402				
4	5,280				

人数 平均値 平均値 平均値 平均値
 この場合、どの学年の間にも統計的な差があり、学年があがるほど得点が高いことが示されている。

【例 2】

1 わかりやすい授業だった

規模別群 (人)	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ		
		1	2	3
151 ~	14,976	3.57	3.58	3.61
51 ~ 100	17,797	3.58		
101 ~ 150	14,693			3.72
~ 50	12,943			

この場合、51 ~ 100 人規模の授業は、サブグループ 1 と 2 の両方に含まれている。
 つまり 51 ~ 100 人規模の授業は、151 人以上規模の授業とも 101 ~ 150 人規模の授業とも差がないが、151 人規模の授業は 101 ~ 150 人規模の授業よりも得点が低いことが示されている。

表5 「 1 わかりやすい授業だった」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ				
		1	2	3	4	5
理	2,873	3.39				
法	6,938		3.55			
経済	7,616		3.57			
観光	3,751		3.59			
社会	6,365		3.62	3.62		
文	9,126			3.66		
コミ福	3,962				3.74	
全力リ	16,023				3.75	
講座	2,716					3.86

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表6 「 2 授業全体の目標が明確だった」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
理	2,871	3.57					
法	6,944	3.62	3.62				
経済	7,610		3.63				
観光	3,751		3.66	3.66			
社会	6,364			3.72	3.72		
文	9,125				3.73		
全力リ	16,011				3.75	3.75	
コミ福	3,961					3.80	3.80
講座	2,716						3.86

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表7 「 3 学問的興味をかきたてられた」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
理	2,871	3.34					
経済	7,613	3.40	3.40				
法	6,943		3.47	3.47			
観光	3,751			3.49	3.49		
社会	6,365			3.49	3.49		
全力リ	16,010				3.54	3.54	
講座	2,716					3.56	
文	9,124					3.59	
コミ福	3,960						3.68

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表8 「 4 この授業を受けて満足した」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ				
		1	2	3	4	5
理	2,870	3.45				
法	6,943		3.54			
経済	7,611		3.54			
社会	6,365		3.59			
観光	3,751		3.60	3.60		
全力リ	16,011			3.66	3.66	
文	9,121				3.68	
コミ福	3,963					3.75
講座	2,714					3.76

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

参考) 2004年度データ(以下の表5～8は2004年度報告書P.69より転載)

表5 「1 わかりやすい授業だった」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
理	3,300	3.37					
法	7,193						
経済	7,250		3.51				
社会	7,128		3.60				
コミ福	3,683			3.64	3.64		
全カリ	16,890			3.64	3.64		
観光	3,116				3.70	3.70	
文	9,370					3.75	
講座	2,479						3.85

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表6 「2 授業全体の目標が明確だった」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
理	3,299	3.54					
法	7,190	3.54					
経済	7,249	3.58	3.58				
全カリ	16,890		3.63				
社会	7,125			3.65			
コミ福	3,682			3.69			
観光	3,117				3.75	3.75	
文	9,369					3.76	
講座	2,479						3.86

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表7 「3 学問的興味をかきたてられた」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
経済	7,248	3.31					
理	3,299	3.32					
法	7,191	3.38	3.38				
社会	7,125		3.42				
全カリ	16,890		3.45	3.45			
講座	2,480			3.47			
観光	3,116				3.54	3.54	
コミ福	3,681					3.57	
文	9,365						3.62

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表8 「4 この授業を受けて満足した」に関する、学部別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
理	3,298	3.40			
法	7,190	3.44			
経済	7,248	3.45			
社会	7,124				
全カリ	16,889		3.55		
コミ福	3,683				
観光	3,116			3.67	3.67
講座	2,480			3.70	3.70
文	9,366				3.72

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

6 - 5 「 . 総合評価」の平均値の授業規模による比較

「資料の読み方」は、P.74 を参照のこと。

表9 各群の科目数

規模別群(人)	~50	51~100	101~150	151~	計
科目数	520	265	100	70	955

表10 「1 わかりやすい授業だった」に関する、規模別群毎の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度数	統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
151~	14,935	3.58	3.63	3.67	3.72
101~150	12,097				
51~100	18,711				
~50	13,627				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表11 「2 授業全体の目標が明確だった」に関する、規模別群毎の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度数	統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
151~	14,933	3.63	3.66	3.73	3.81
101~150	12,092				
51~100	18,706				
~50	13,622				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表12 「3 学問的興味をかきたてられた」に関する、規模別群毎の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度数	統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
151~	14,931	3.42	3.46	3.55	3.62
101~150	12,092				
51~100	18,708				
~50	13,622				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表13 「4 この授業を受けて満足した」に関する、規模別群毎の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度数	統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
151~	14,928	3.52	3.57	3.66	3.74
101~150	12,094				
51~100	18,706				
~50	13,621				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

なお、群(~50名) が評価が高く 群(151名~) の評価が相対的に低いという結果は、2004年度のデータ(2004年度報告書P.70参照)と同じ傾向だった。

6-6 項目の相関

資料の読み方

- ・ 各項目どうしが、どの程度関連しているか、その関連の強さが示されている。
- ・ 行と列の項目番号をみて、知りたい項目どうしがまじわるところの数字が、関連の強さを示す相関係数である。
- ・ 数字の絶対値が大きいほど、関連は強く、数値がマイナスである場合は、どちらかが高得点であるほど、もう一方は低得点である傾向を示す。
- ・ 一般的に、相関係数の絶対値は、0.20~0.40：弱い相関、0.40~0.70：比較的強い相関、0.70~1.00：強い相関とされている。本資料では、資料を読み取りやすくなるため、便宜的に、絶対値0.4以上を太字で、0.6以上を網掛けで表記した。

表14 全学の項目間相関

	I1	I2	I3	I4	I5	I6	I1	I2	I3	I4	I5	I6	II7	II8	II9	III1	III2	III3	III4	IV1	IV2	IV3	IV4	
I. 授業への 準備状況・ 参加態度	I1																							
	I2	435																						
	I3	516	464																					
	I4	516	418	433																				
	I5	464	426	433	426																			
	I6	418	426	433	426	418																		
II. 教員の 授業の 進め方	II1																							
	II2																							
	II3																							
	II4																							
	II5																							
	II6																							
III. 授業内容	III1																							
	III2																							
	III3																							
	III4																							
	III5																							
	III6																							
IV. 授業の 総合評価	IV1																							
	IV2																							
	IV3																							
	IV4																							

注) 本分析に用いたデータ数は56,842、無相関の検定に使用した有意水準は、すべてp<.01

6 - 7 「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較

「資料の読み方」は、P.74 を参照のこと。

表 1 5 「 1 わかりやすい授業だった」に関する、学年別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,567	3.45	3.59	3.70	3.92
2	20,328				
3	16,402				
4	5,280				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表 1 6 「 2 授業全体の目標が明確だった」に関する、学年別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	17,640	3.54	3.61	3.72	3.92
2	18,638				
3	15,305				
4	6,004				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表 1 7 「 3 学問的興味をかきたてられた」に関する、学年別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	17,636	3.40	3.48	3.58	3.77
2	18,633				
3	15,303				
4	6,001				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表 1 8 「 4 この授業を受けて満足した」に関する、学年別の度数および平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	17,636	3.49	3.60	3.70	3.91
2	18,630				
3	15,302				
4	6,002				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

なお、上記の傾向は、2004 年度と同じ傾向であった (2004 年度報告書 P.72 参照)。

6 - 8 「所見集」の設置場所

「所見集」は以下の図書館に設置する。

池袋本館および新座図書館：全科目

人文科学系図書館：文学部、全学共通カリキュラム

社会科学系図書館：経済・社会・法学部、全学共通カリキュラム

自然科学系図書館：理学部、全学共通カリキュラム

2005年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会（2006年10月現在）

座長	栗田和明	（文学部）
	菅沼隆	（経済学部）
	木田祐司	（理学部）
	石川淳	（経営学部）
	箕口雅博	（現代心理学部）
	大野久	（学校・社会教育講座）

分析協力

大学教育開発・支援センター

副センター長	大野久	（学校・社会教育講座）
学術調査員	茂垣まどか	

2005年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2006年10月発行

編集 立教大学 2005年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 神谷印刷

〒115-0043 東京都北区神谷1-20-8

TEL 03-3912-2571 FAX 03-3927-3863